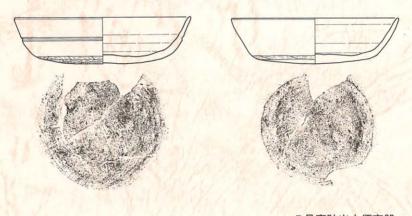
八幡坂遺跡ほか発掘調査報告書



5号窯跡出土須恵器

平成21年8月

白石市城南第二土地区画整理組合白石市教育委員会

例 言

- 1. 本書は白石市城南第二土地区画整理整理事業に係る発掘調査報告書である。発掘調査及び 調査報告書刊行に係る経費は白石市城南第二土地区画整理組合が負担した。
- 2. 土層の色調表記については、『新版標準土色帖』を用いた。
- 3. 検出遺構の略号は以下の通りである。

SR:窯跡 SI:竪穴住居跡 SD:溝跡 SK:土坑 P:柱穴

- 4. 本報告書の作成は、図版作成が主として宮城県教育庁文化財保護課、本文執筆は菅原祥夫、 清野俊太朗、日下和寿があたり、日下が編集した。執筆分担は次のとおりである。第4章及 び第5章1~6の(4)までは菅原祥夫、第1章、第3章は清野俊太朗、その他は日下である。
- 5. 報告書作成等にあたっては、宮城県教育庁文化財保護課をはじめとする次の機関・個人から協力をいただいた(敬称略)。

土師器、須恵器 石本 弘 (白石市文化財保護委員)、佐藤敏幸 (宮城県考古学会々員) 近世陶磁器 佐藤 洋 (仙台市教育委員会)、八重樫忠郎 (岩手県平泉町役場) 羽柴直人 (財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)

- 6. 現地調査及び資料整理に指導いただいた故中橋彰吾白石市文化財保護委員長、故高橋辰男 委員に哀悼の意を表する。
- 7. 発掘調査成果の一部については、『昭和62年度 宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨』 に掲載されているが、本書の内容が優先する。
- 8. 第1図は国土地理院の2万5千分の1白石、大河原、白石東部、白石南西部を複製して使用した。第3図は白石市土地情報提供GISを使用した。
- 9. 本事業の調査記録及び出土品は、白石市教育委員会生涯学習課が保管しており、依頼に応じて公開している。

調査要項

1 遺跡名称 確認調査 八幡坂遺跡(遺跡番号02442)、八幡坂西陣屋跡(02249)、

八幡坂西遺跡(02345)、前山遺跡(02115)事前調查 八幡坂遺跡

2 遺跡所在地 白石市大平森合字八幡坂地内

3 調 査 主 体 白石市城南第二土地区画整理組合

白石市教育委員会

4 調查担当 白石市教育委員会社会教育係

5 調 査 員 白石市教育委員会 清野俊太朗

白石市文化財保護委員 中橋彰吾

高橋辰男

元福岡小学校教諭 後藤利喜郎

6 調查指導 宮城県教育庁文化財保護課

7 調査協力 宮城県教育庁文化財保護課

仙台育英学園高等学校教諭 渡辺泰伸

仙台市博物館

田中則和

仙台市立宮城野小学校 山田 稔

白石市文化財保護委員 佐々木敏雄

仙台市博物館

佐々木和博(所属、役職名は調査当時)

高橋喜久寿、高沼秋雄、大野勝男、阿部 直、広田ハル、斎藤丈夫、 作 業 員

日下秀樹、最上修一、日下和寿

8 調査期間 確認調査 昭和62年2月24日~3月29日

事前調查

昭和62年8月24日~10月

9 調査面積 確認調査 801㎡

事前調査約 5.000m²

第1章 調査に至る経過

白石市第二城南土地区画整理組合設立準備会から当該地における土地区画整理の計画が白石 市教育委員会に提示されたのは昭和61年4月であった。

その後、白石市役所では都市計画課が窓口になり、関係各課と協議を重ねた。市教育委員会は同時に県教育庁文化財保護課に概要を報告し、その取り扱いについて種々協議をしてきた。

その結果、当該区画整理地内に遺跡が存在することから、昭和62年2月から3月にかけて確認調査を実施することになった。対象は八幡坂遺跡、八幡坂西陣屋跡、八幡坂西遺跡、前山遺跡であった。

上記のうち八幡坂遺跡では、須恵器の窯跡が5基発見された。八幡坂西陣屋跡、八幡坂西遺跡では、ごく少量の遺物が出土したが、遺構はなく、事前の発掘調査は実施しなかった。前山遺跡は、既に宅地造成のため、削平を受けていたが、それ以外の範囲にも遺構が延びることを予想して確認調査を実施したが、遺構は発見されなかった。

市教育委員会では係る確認調査の結果をもとに県教育庁文化財保護課及び白石市第二城南土地区画整理組合設立準備会と更に協議を行い、区画整理組合の正式な発足を待って八幡坂遺跡の発掘調査委託契約を締結し、県教育庁文化財保護課の指導、協力を得て昭和62年8月に発掘調査を開始した。同10月に現地における発掘調査を完了した。現地説明会は10月3日に開催した。

第2章 八幡坂遺跡周辺の遺跡と環境

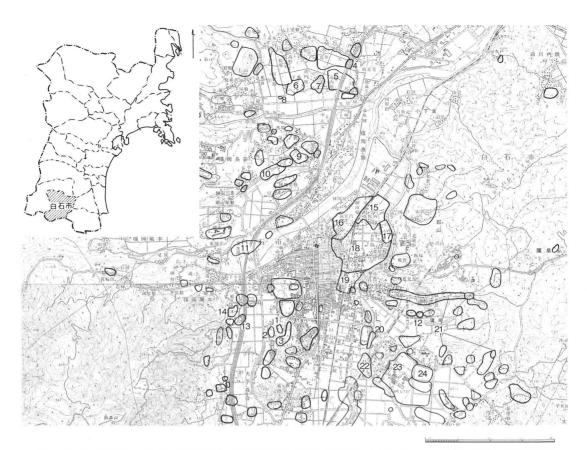
八幡坂遺跡周辺の丘陵上、いわいる傑山寺の背後の丘陵には遺跡が多い。今回の土地区画整理事業地内には八幡坂遺跡、八幡坂西遺跡、八幡坂西陣屋跡、前山遺跡がある。このうち八幡坂西遺跡と八幡坂西陣屋跡は同一地を指し、遺跡範囲も重複している。遺跡の種別は、前者が散布地、後者が伊達政宗による白石城攻めの陣屋跡として登録されている。

隣接する遺跡を含めた地区は戦後、片倉家第15代当主であった信光氏が詳細分布調査を実施 している。その結果、古代の瓦、須恵器窯跡の存在が古くから指摘されていた地区であった(白 石市史編さん委員会1976)。以下、窯跡を中心として周辺の遺跡を概観したい。

隣接する兀山遺跡の古代瓦の考察において(佐々木、菊地1985)、前山遺跡の須恵器窯について言及があった。兀山遺跡は平成18年5月に東北大学によって試掘調査が行われ、焼土、瓦片の出土が確認されている。

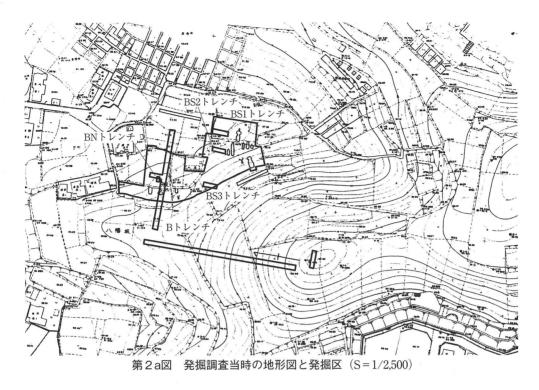
白石城本丸内には益岡遺跡があり、古代の散布地となっているが、八幡坂遺跡と本来は同一 丘陵であることから、古代の窯跡の存在を指摘する見解もある。

中世になると本遺跡から東へ5.4kmの位置に一本杉窯跡がある。周囲には東北、黒森、市ノ



番号	遺跡名	種 別	時 代	番号	遺跡名	種 別	時 代
1	八幡坂遺跡	窯跡	古代	13	中屋敷陣屋跡	陣屋	近世
2	八幡坂西遺跡・八幡坂西陣屋跡	散布地、陣屋跡	古代、近世	14	月心院遺跡	散布地、寺院	古代、近世
3	前山遺跡	散布地、窯跡	古代	15	弥陀内遺跡	散布地	弥生~平安
4	御所内遺跡	集落	縄文早、中、後、平安	16	祢宜内遺跡	散布地	奈良、平安
5	青木遺跡	集落	縄文早、中、晩、弥生、平安	17	観音崎遺跡	集落	古墳後~平安
6	下館遺跡	散布地、城館、製鉄遺跡	縄文後、平安、中世	18	大畑遺跡	散布地、官衙	弥生~中世
7	道内原遺跡	散布地、製鉄遺跡	奈良、平安	19	本郷遺跡	散布地	古代
8	堂田廃寺跡	寺院	平安	20	梅田遺跡	集落	弥生、古墳
9	下ノ神明遺跡	散布地	縄文中、平安	21	鷹巣古墳群	前方後円墳、円墳	古墳、古代
10	田上遺跡	散布地	縄文前、中	22	谷津川遺跡	散布地	縄文~古代
11	菅生田遺跡	集落	縄文前~後、弥生	23	白石条里制跡推定地	水田跡	古代、中世
12	蛭賀屋敷遺跡	散布地	古墳時代	24	和尚堂遺跡	散布地	縄文後、古代

第1図



沢窯跡があるが、正式な発掘調査を実施しているのは、一本杉窯跡のみである。ここでは、13世紀後半頃に20基の窯が中世陶器生産を行っていた。甕、壺、摺鉢を主体として生産していた。近世では3つの窯跡が知られている。北に1.5kmにある瓦焼場窯跡は瓦、陶器を生産していた(相原2000)。鍋石窯跡は北西1.9kmにあり、陶磁器が散布している。瓦の生産も指摘されている(相原2000)。萩の坂窯跡は3.4kmの位置にあり、陶磁器が生産されたと考えられている。中世になると、近世白石城のある丘陵、兀山のある丘陵に城館が営まれるようになる。古くから片倉氏は、これらの丘陵を中世における白石城として捉えている(片倉1965)。

したがって八幡坂遺跡が所在する傑山寺丘陵は古代においては生産の場として利用され、中世~戦国期においては城館として利用されたことが窺える。

その他周辺の遺跡として、上鹿野遺跡、新館西遺跡などがあるが、発掘調査が実施されておらず、内容がよく分からない遺跡が多い。

関連資料と考えられるものは、写真図版13-7に示した。川原石に須恵器が溶着したもので、 窯跡などでよく見られる礫焼台である。示したものは長さ16cm、幅16cm、厚さ5cmで、暗灰 褐色を呈している。須恵器破片4点ほどが表裏面に融着している。昭和53年、市内の上西周次 氏から寄贈を受けたものである。一緒に保管してあった紙片には斎川河川改修時に出土と記し てあるが、上西氏は八幡坂遺跡及び前山遺跡周辺に土地を所有していたことから、この周辺に おける耕作中に出土した可能性が高いものである。

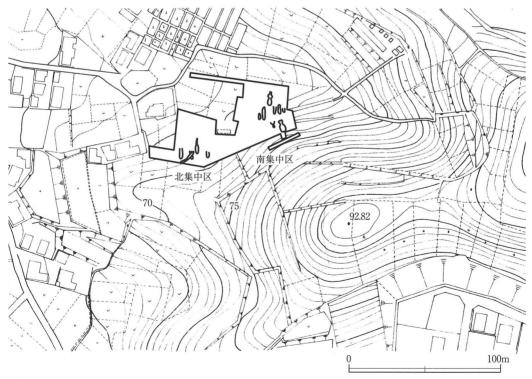
第3章 調査の方法と経過、資料整理

調査の対象地域は、北は市道八幡坂線、南は市道病院線、東は旧奥州街道、西は国道4号線に囲まれた丘陵で、面積は120,000㎡である。

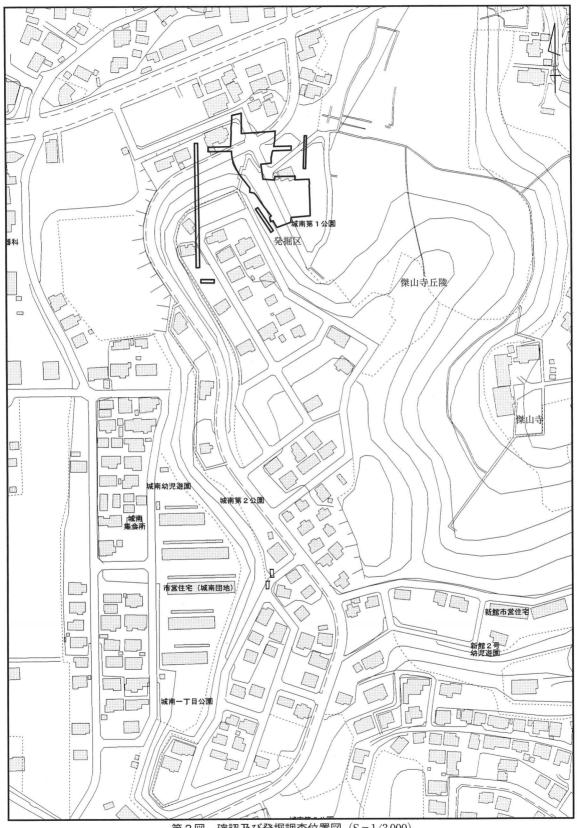
遺跡は丘陵北端に近い東斜面に立地しており、現況は畑地、荒蕪地である。8月24日に調査地内の除草を実施し、同27日から表土除去作業を開始した。遺構の確認作業は調査地域の北側から開始し、順に南側に移動して行った。浅い所では10cm、深い所では60cmで地山面に達した。調査区名はほぼ北半分を北調査区、南半分を南調査区とした。その結果、北調査区では窯跡4基、南調査区では同8基、並びにその他の遺構が検出された。引き続き遺構を精査し、実測図の作成や写真撮影を実施した。

実測図作成にあたっては、調査区内に20mごとの国家座標に基づく基準点No.7、No.8を使用 した。各遺構の実測図作成は遺構の両端に任意の点を設定し、それと直交する任意の点を使用 して行った。

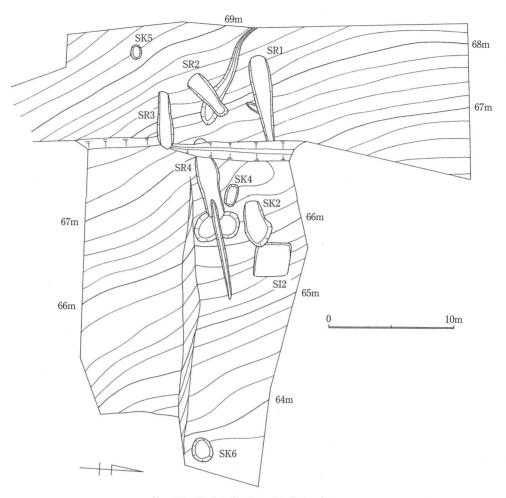
資料整理では土器の水洗い、注記、接合を行い、県文化財保護課に実測及び写真撮影作業の 協力を仰いだ。



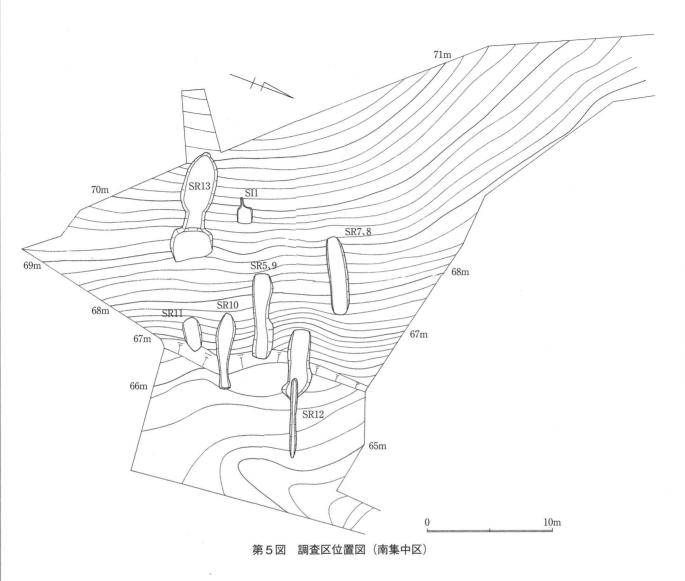
第2b図 遺構全体図 (S=1/2,500)



第3図 確認及び発掘調査位置図 (S=1/3,000)



第4図 調査区位置図(北集中区)



第4章 検出された遺構と遺物

この発掘調査によって、須恵器窯跡12基、竪穴住居跡2軒、土坑5基、土器埋設遺構1基が検出され、コンテナ約70箱分の遺物が出土した。それらは、白石盆地に浮かぶ、独立低丘陵(傑山寺丘陵)の東向き斜面上に立地し、須恵器生産に関わる一連の遺構群と捉えられる。平面分布には、次の2つのグループが認められる(第4・5回)。

- ◎ 北集中区……1~4号窯跡、2号住居跡、1·2·4·5·6号土坑
- ◎ 南集中区……5、7~13号窯跡、1号住居跡、1号甕棺墓、

以下、順に沿って事実報告を行っていく。

なお、今回の報告は調査から既に20年近くが経過しており、いくつかの制約が伴った。一部の遺構は、原図・写真類が所在不明になり、構築位置、堆積土、被熱状態が確認できなかった。また掲載遺物は、当時の図版をそのまま使用したので、坏偏重の選択基準となっている。その解決策として、補足図版は作成したが、時間の制約上わずかの追加にとどまった(第42~44図)。今日の研究水準からすれば、甕類の定量的な提示が必要であり、この点は、今後の課題としておきたい。

具体的記述を行うに先立って、これらの点をあらかじめ断っておく。

1. 須恵器窯跡

12基検出された。 8世紀の地下式直立煙道窯(5・13号窯跡)と、 9世紀の半地下式奥部開口窯($1\sim4$ 、 $7\sim11号窯跡$)に大別され、後者はほぼ窯尻まで確認できたのが、 $4\cdot5\cdot8\cdot10\cdot13号窯跡$ にとどまっている。

なお、このうち1号窯跡は、外周溝であることが判明した1号溝跡と一括で記述を行う。また、窯構造と細部名称は、望月精司(望月2004)の分類案に準拠する。

1号窯跡 (+1号溝跡)

【位置・遺存状態】北集中区で検出された、標高68mの等高線上に横並びした3基の須恵器窯跡 ($1 \sim 3$ 号)のうち、向かって右(北側)のものにあたる。窯尻は欠損していた。

【重複関係】外周溝(1号窯跡)が2号窯跡と重複し、これより新しい。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部、それに外周溝からなる半地下式窪窯である。

【遺存規模】全体……長さ7.31m以上(窯体5.18m以上)

焼成部…長さ3.78m以上 最大幅……1.52m

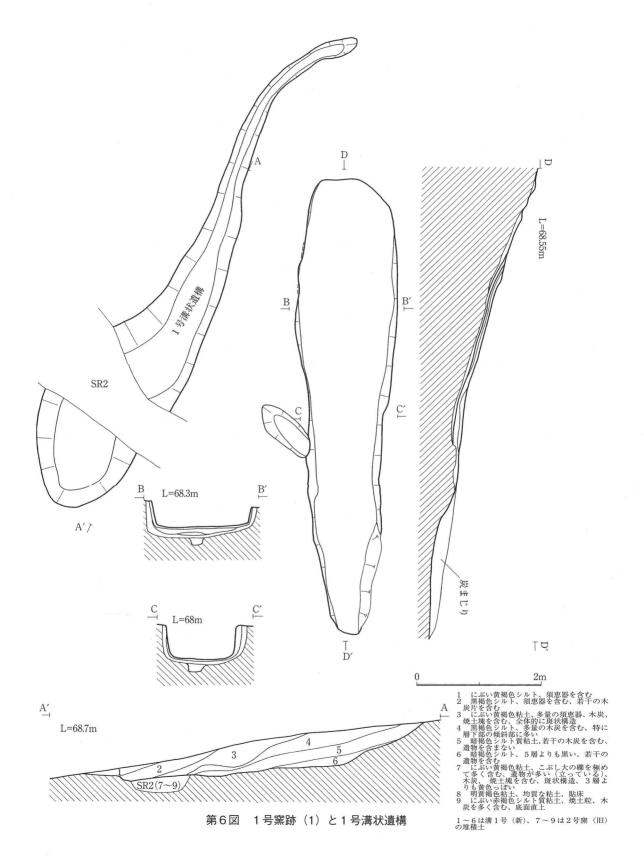
遺存高…0.54m

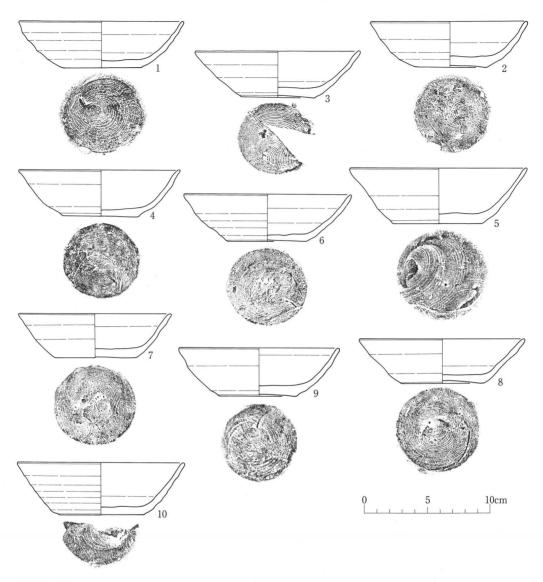
燃焼部…長さ1.40m

焼成部境幅…1.06m 焚口幅…0.90m 遺存高…0.56m

前庭部…長さ2.13m

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。

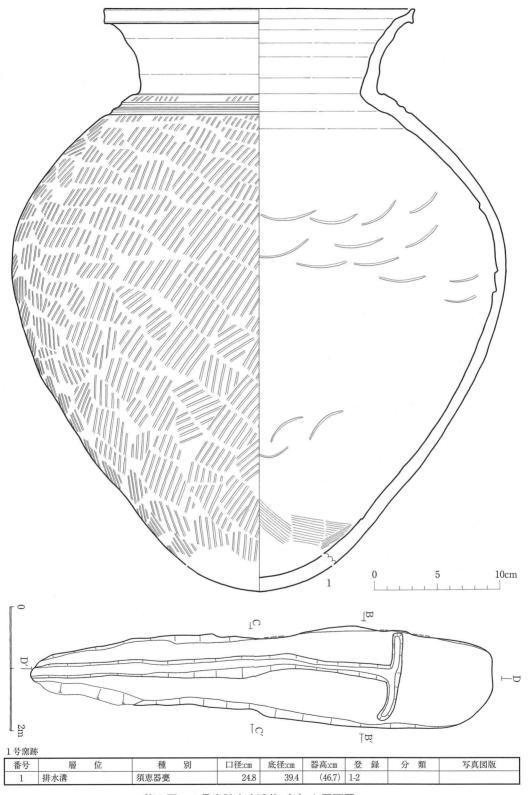




1号窯跡、周溝

番	号	層	位	種	別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1		周溝		須恵器坏		(13.1)	6.2	3.8	1-2	СІІс	
2		周溝		須恵器坏		12.6	6	3.6	1 ₹ -8	СІІс	6 - 3 - 2
3		周溝		須恵器坏		13.1	5.8	3.7	1 ₹ -9	СІІс	6 - 2 - 2
4		周溝		須恵器坏		12.8	6	3.8	1 ₹ -3	СІІс	6 - 1 - 2
5		周溝		須恵器坏		14.1	7.3	4.5	1₹-4	ВІІс	6 - 2 - 1
6		周溝		須恵器坏		13.4	6.3	3.8	1 ₹ -5	СІІс	6 - 3 - 1
7		周溝		須恵器坏		12.1	6.4	3.6	1 ₹ -1	ВІІс	6 - 1 - 1
8		周溝		須恵器坏		(13.2)	6.5	3.6	1 ₹ -6	СІІс	
9		周溝		須恵器坏		12.8	6.2	3.9	1 ₹ -2	СІІс	
10		周溝		須恵器坏		(13.3)	(6.6)	4.2	1 ₹ -7	ВПс	

第7図 1号窯跡出土遺物(1)



第8図 1号窯跡出土遺物(2)と平面図

このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、中膨らみ気味の形態をなす。床面は、部分的に3面認められ、還元→酸化している。傾斜は16°を測る。また、燃焼部境の左側壁に浅い窪みが認められる。110cm×42 cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは、8~10cmを測る。

【燃焼部】平面形は、方形を呈し、燃焼部に対して緩やかにくびれる。床面は1面みられ、還元 \rightarrow 酸化していた。傾斜は、 3° を測る。

【床下溝】焼成部中程から窯体外に、「T」字型の暗渠排水が設けられている。溝幅20~31cm、深さ12~15cmを測り、上面は、礫を並べた蓋が架けられていた。

【前庭部】燃焼部と連続して構築され、縦長の平面形を有する。底面高は、手前に向かって次 第に浅くなり、消失する。

【外周溝】窯体外の左側で検出された。平面形は、緩やかな「S」字状をなし、幅は斜面下に向かって幅広になる。最頂上部分は、排煙口付近に位置したと推定される。規模は、長さ8,86 m、溝幅20~154cm、検出面からの深さ30~40cmを測る。機能は、送風装置、作業通路、排水溝を兼ね備えたと考えられる

【出土遺物】須恵器坏10点、甕1点、こね鉢1点を図示した。このうち、須恵器坏とこね鉢は、外周溝(1号溝跡)からまとまって出土したものである。したがって、帰属関係にはやや不安はあるが、それらを含めて一応共伴資料とみておく。

類恵器坏(第7図 $1\sim10$)器形は、坏形のもの($3\cdot5\cdot7\cdot8\cdot10$)と、椀形のもの($1\cdot2\cdot4\cdot6\cdot9$)がみられる。傾向としては、前者の方が口径/底径比が大きい。底部はすべて回転糸切り無調整である。

須恵器甕(第8図1)底部を欠いているが、丸底とみられる大型品である。頸部外面の直下に 2条の沈線が巡り、胴部外面に平行叩き目、内面に当て目が観察される。

須恵器こね鉢(第43図4)外面に、多数の刺突が施された底部片である。

2号窯跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。標高68mの等高線上に横並びした3基の須恵器窯跡(1~3号)のうち、中間のものにあたる。窯尻は欠損していた。

【重複関係】1号窯跡の外周溝(1号溝跡)と重複し、これより古い。

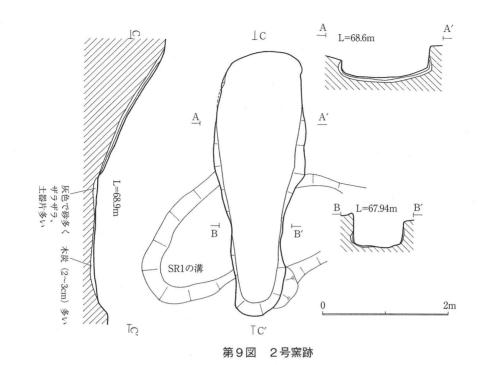
【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式窖窯である。

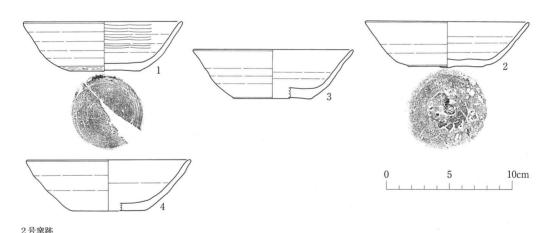
【遺存規模】全体……長さ4.20m以上(窯体3.07m)

焼成部…長さ2.20m以上 最大幅……1.36m

遺存高…0.55m

燃焼部…長さ0.87m 焼成部境幅…1.08m 焚口幅…0.72m 遺存高…0.50m





2 'J may	l'							
番号	層 位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	
1	埋土	須恵器坏	12.7	5.6	4	2-1	Са	6 -
2	床面	須恵器坏	13	6	3.6	2-4	СІс	6 -

备亏	僧 位	種 別	口往:cm	低住:cm	岙局:CM	豆 琢	分 独	与具凶젮
1	埋土	須恵器坏	12.7	5.6	4	2-1	Са	6 - 4 - 1
2	床面	須恵器坏	13	6	3.6	2-4	СІс	6 - 5 - 1
3	床面	須恵器坏	12.7	6.3	3.9	2-2	ВІс	
4	床面	須恵器坏	13.1	6	4.1	2-3	СІс	6 - 4 - 2

第10図 2号窯跡出土遺物

前庭部…長さ1.13m

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。 このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広になり、窯尻に向かってすぼまる。床面は、 1 面認められ、還元→酸化している。傾斜は27°を測る。

【燃焼部】平面形は、燃焼部に対してくびれ、焼成部境から手前に先細り気味に伸びる。床面は1面みられ、酸化している。傾斜は水平である。

【前庭部】燃焼部と連続して構築され、底面レベルも一致する。木炭層の堆積がみられた。

【出土遺物】土師器坏1点と須恵器坏3点を図示した。前者は遺構には伴っていない。

土師器坏(第10図1)埋土から出土した。器形は「椀形」を呈し、ロクロ調整されている。底部は、切り離し不明→回転ヘラケズリである。器形及び製作技術は土師器坏であるが、焼成は 須恵質である。

須恵器坏 (第10図 $2 \sim 4$) いずれも床面から出土した。器形は、2が「椀形」、 $3 \cdot 4$ が「坏形」と「椀形」の中間形態を呈する。2は、底部ヘラ切り無調整である。

3号窯跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。標高68mの等高線上に横並びした3基の須恵器窯跡 ($1\sim3$ 号) のうち、向かって左側のものにあたる。窯尻は、欠損しているが、窯体幅の状況からみると、ほぼ原形を留めていると推定される。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる半地下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ4.09m以上(窯体3.40m以上)

焼成部…長さ2.46m以上 最大幅……1.09m

遺存高…0.42m

燃焼部…長さ0.96m

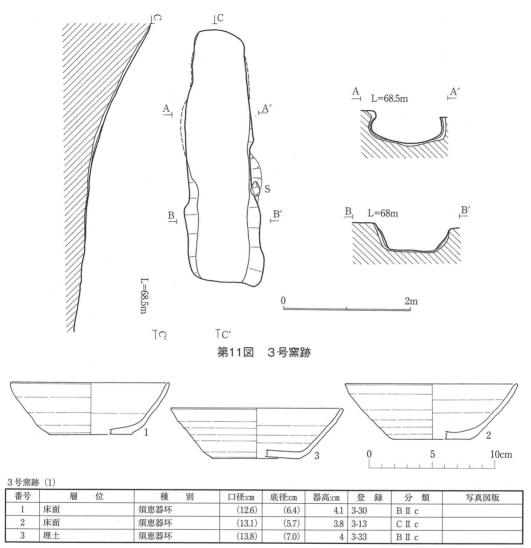
焼成部境幅…0.83m 焚口幅…0.80m 遺存高…0.44m

前庭部…長さ0.69m

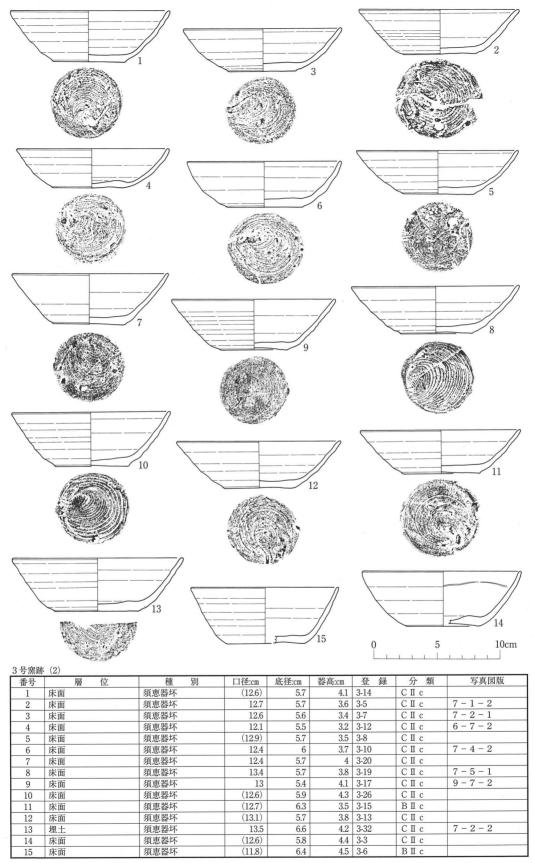
【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。 このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広になり、窯尻に向かってすぼまる。床面は、 1 面認められ、還元→酸化していた。傾斜は、焼成部境付近で17°、窯尻側で26°を測る。 なお、焼成部境の右側壁から、礫が1 個検出されている。

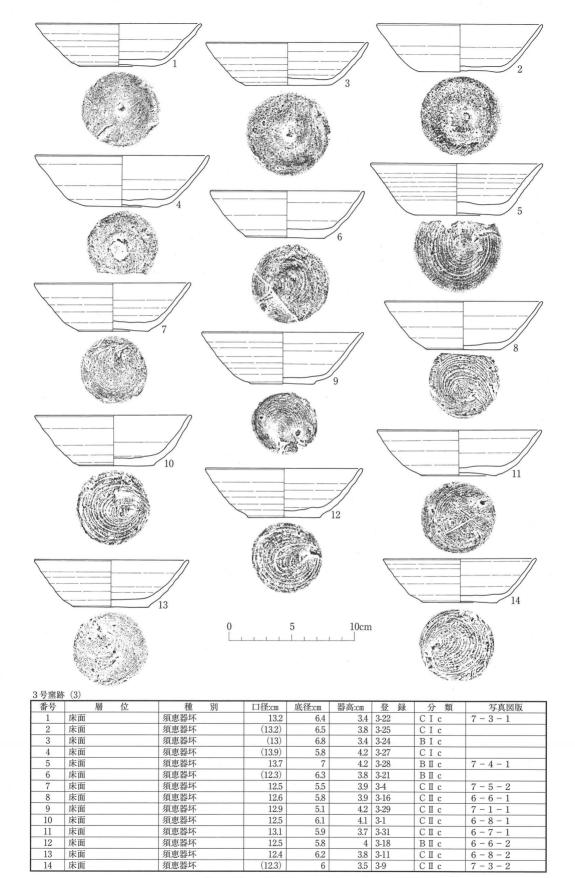
【燃焼部】平面形は焼成部に対してくびれ、同じ幅で手前に直線的に伸びる。床面は1面で、酸化し、傾斜は6°である。



第12図 3号窯跡出土遺物(1)



第13図 3号窯跡出土遺物(2)



第14図 3号窯跡出土遺物(3)

【前庭部】燃焼部と連続して構築され、壁は自然傾斜に沿って消失する。なお、写真には右側 壁と手前壁に礫の検出された様子が写っている。しかし、実測図には省かれており、原位置を 移動したものと判断されたと思われる。

【出土遺物】 須恵器坏32点を図示した。

須恵器坏(第12~14図) 第13図13、第12図3の他は、すべて床面出土の共伴資料である。器 形は、第13図7・14・15、第14図1~5、第12図1~3が「坏形」、第13図3~5、第14図8 ~14が「椀形」に分類され、中間形態も存在する。この2タイプの底部を観察してみると、「坏 形 | は回転ヘラ切り無調整、「椀形 | は回転糸切り無調整の多い傾向が指摘され、器形と製作 技術の相関関係が窺える。

4号窯跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。前述した3基の須恵器窯跡(1~3号)の位置よ り標高の低い、66.0~67.0mラインに営まれている。周囲には、ほぼ同時期と考えられる2号 住居跡、2号土坑のほか、1・4号土坑が認められる。窯尻まで検出され、長大な全体像が捉 えられた。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる半地下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ13.55m(窯体6.35m)

焼成部…長さ4.40m

最大幅……1.31m

遺存高…0.46m

燃焼部…長さ1.95m 焼成部境幅…1.18m 焚口幅…1.20m 遺存高…0.63m

前庭部…長さ7.20m

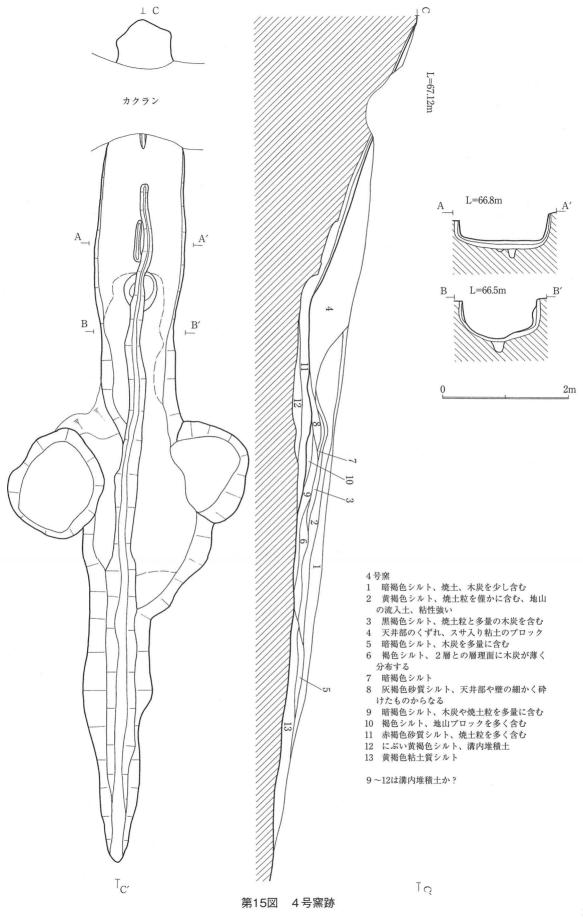
【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。 このことから、奥部開口型と判断される。

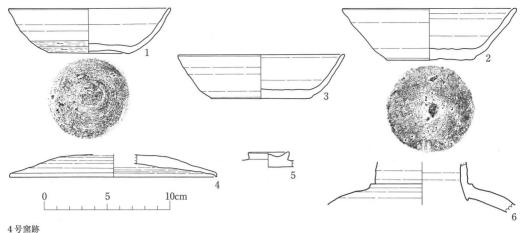
【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広気味になり、窯尻に向かってすぼまる。床面は、 1 面認められ、還元→酸化していた。縦断面形は直線的に外傾し、傾斜は19°を測る。中軸線 上には、窯体外に連続する暗渠排水溝が認められる

【燃焼部】焼成部境から、焼成部に対してややくびれ、同じ幅で手前に直線的に伸びる。床面 は1面で、還元→酸化していた。傾斜は3°を測って、ほぼ水平に近く、焼成部との違いは明 瞭である。

【前庭部】平面形は、焼成部より幅広で、両側壁に土坑状の落ち込みが伴う。また、中軸線上 には窯体からの連続で、排水溝が直線的に伸びている。

【出土遺物】須恵器坏3点、蓋2点、長頸瓶1点を図示した。すべて床面共伴資料である。





番号	層 位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	床	須恵器坏	13	6.5	3.7	4-1	Ва	
2	床	須恵器坏	14	7.1	4.1	4-2	ВІс	7 - 6 - 1
3	床	須恵器坏	13.3	7.9	3.5	4-4	ВІЬ	7 - 6 - 2
4	床	須恵器蓋	16.6			4-5		
5	床	須恵器蓋				4-3		
6	床	須恵器長頸壺	,			4-6		

第16図 4号窯跡出土遺物

須恵器坏(第16図 $1\sim3$)1は、体部下端に、底部から連続した回転ヘラケズリ調整を受けている。このため、底径は小さめである。切り離し技法は不明。 $2\cdot3$ は、底径の大きめな「坏形」を呈している。底部は、回転ヘラ切り無調整である。

須恵器蓋(第16図 $4 \cdot 5$) 4 は、端部が短く折れ曲がる天井部、5 はつぶれた宝珠型のつまみである。

須恵器長頸瓶(第16図6)頸部片であり、外面下端にリング状凸帯を有している。

5号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基(5、7~12号)の須恵器窯跡のうち、中央のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の須恵器窯が営まれているが、本窯跡は下層遺構である。そのため、上部構造は破壊されているものの、窯尻まで確認された。

【重複関係】 9号窯跡と重複し、これより古い。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる地下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ7.09m(窯体5.80m)

焼成部…長さ4.20m

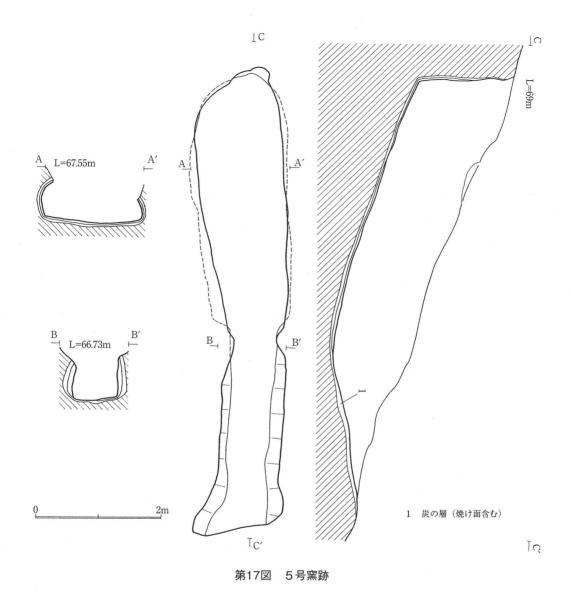
最大幅……1.54m

遺存高…0.61m

燃焼部…長さ1.60m

焼成部境幅…0.74m 焚口幅…0.63m 遺存高…0.68m

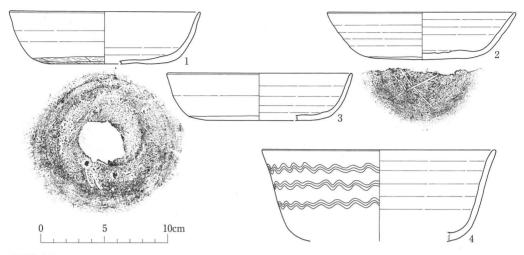
前庭部…長さ1.29m



【煙道部】直立煙道である。位置は、主軸から右へずれ、奥壁より突出している。遺存高152cmを測る。

【焼成部】平面形は、最大幅の位置が窯尻側にある点に特徴がみられ、奥壁は丸みを有する。 床面は1面で、還元→酸化していた。縦断面形は直線的に外傾し、傾斜は20°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部に対して明瞭にくびれ、焼成部境は角張っている。床面は1面で、 焚口に向かって傾斜し、還元→酸化している。傾斜は12°を測る。



5号突跡 (1)

が、力が、	(1)							
番号	層 位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	埋土	須恵器坏	15	12	4.2	5-3	A 2 I b	7 - 8 - 1
2	埋土	須恵器坏	(15)	8.8	3.8	5-17	A 2 I b	8 - 6 - 1
3	焚き口床面	須恵器坏	(14.7)	(11.4)	3.8	5-14	A 2 I b	
4	埋土	須恵器埦	18.7	9.5	(7.3)	5-8	A 2 I b	8 - 2

第18図 5号窯跡出土遺物(1)

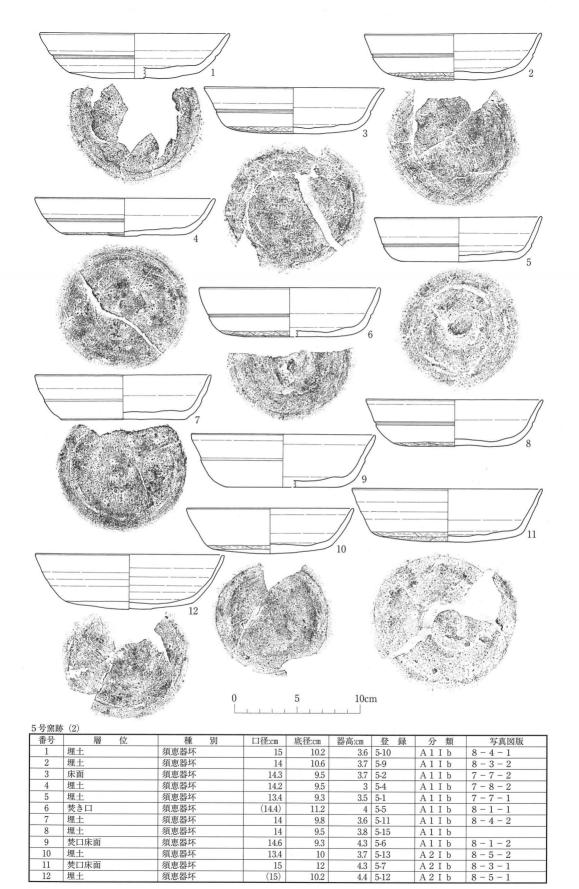
【前庭部】平面・縦断面形ともに、燃焼部の連続で地表とつながる。

【出土遺物】須恵器坏12点、椀2点、甕2点を図示した。

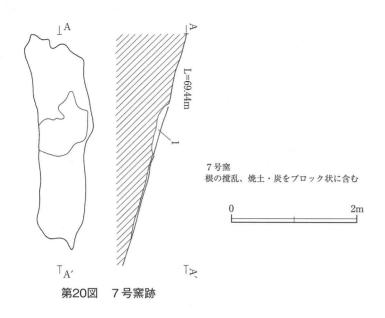
須恵器坏(第18図1~3、第19図)出土状況は、埋土・床面・焚口と一定していない。しかし、器形に斉一性があり、上層 9 号窯跡の製品とは明らかに特徴が違っている。このことから、広い意味での共伴資料と判断される。器形は、口径/底径比が大きく、細部特徴として、口縁部外面下端に沈線ないし段を有するタイプ(第19図1~9)と、無いタイプ(第18図1~3、第19図10~12)の2つがみられる。前者は調査当時、「土師器の有段丸底坏を模倣したもの」と話題を呼んだ資料群である。底部痕跡は、どちらも回転へラ切り→手持ちヘラケズリで共通している。

須恵器埦(第18図4)埋土から出土した。口縁部外面に3段の波状文が巡る。

須恵器甕(第43図5・6)どちらも焚口底面から出土した、口縁部である。内外面に波状文が 巡る点に、特徴がみられる。



第19図 5号窯跡出土遺物(2)



7号窯跡

【位置・遺存状態】 南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基(5、 7~12号)の須恵器窯のうち、右端のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の 須恵器窯が営まれているが、本窯跡は上層遺構である。遺存状態は削平が著しい。

【重複関係】 8号窯跡と重複し、これより古い。

【窯体構造】詳細不明。周辺地形から、半地下式とみられる。

【遺存規模】全体……長さ3.34m以上(全体3.34m以上)

焼成部…窯体長に明記 最大幅………0.83m以上

遺存高…0.00m

燃燒部…不明

焼成部境幅…不明 焚口幅…不明 遺存高…0.00m

前庭部…不明

【煙道部】不明

【焼成部】検出されたのは、この部分と思われる。床面は1面認められ、酸化している。傾斜 は20°を測る。

【燃燒部】不明。

【前庭部】不明。

【出土遺物】なし。

8号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基(5、7 ~12号)の須恵器窶のうち、右端のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の須 恵器窯が営まれているが、本窯跡は下層遺構である。遺存状態は、壁の立ち上がりがほとんど 残っていなかった。しかし、上層7号窯跡の掘り込みが浅く、平面形は短冊状をなすほぼ全体 像が捉えられている。

【重複関係】 7号窯跡と重複し、これより新しい。

【室体構造】煙道部、焼成部、燃焼部からなる半下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ6.66m(窯体6.66m:焼成部・燃焼部の境界は不明瞭)

焼成部…窯体長に明記

最大幅……1.20m

遺存高…0.12m

燃焼部…窯体長に明記 焼成部境幅…不明 焚口幅…0.80m 遺存高…0.09m

前庭部…なし?

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このこ とから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、やや先細り気味をなし、窯尻で丸くおさまる。床面は、窯尻付近で2面 認められ、還元→酸化している。縦断面形は直線的に外傾し、傾斜は15°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部とほぼ同じ幅で連続し、他の窯跡のようにくびれない。ただし、 焼成部境は、平面・断面とも不明瞭で、焼成部とスムーズに連続する。床面は1面で、還元→ 酸化している。傾斜は12°を測る。

【前庭部】斜面下端付近が相当するかも知れない。ただ、底面が酸化しているので、燃焼部と の区別は判然としない。

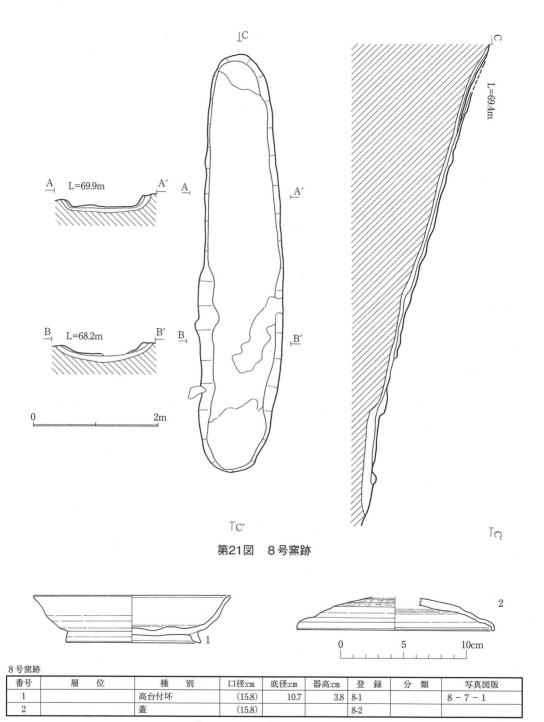
【出土遺物】 須恵器高台坏1点、蓋1点を図示した。

須恵器高台坏(第22図1)床面から出土した。器形は、口径/底径比が大きく、口縁部が外反 気味に開いている。底部はヘラ切り無調整である。

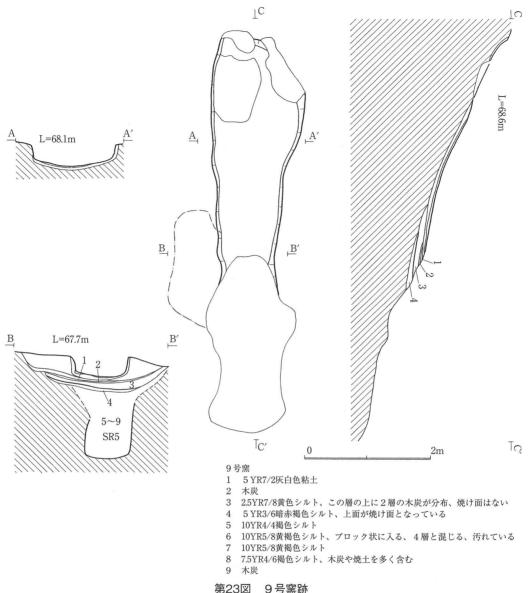
須恵器蓋(第22図2)埋土から出土した。器形は、口縁部端が短く折れ曲がる。1とセットに なる可能性があると思われる。

第9号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基(5、7 ~12号) の須恵器窯跡のうち、中間のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の 須恵器窯が営まれており、本窯跡は上層遺構である。遺存状態は、窯尻が残っていなかった。 また、燃焼部下端は新旧関係を誤認し、下層の5号窯跡を先に掘り込んでいるため、調査でき



第22図 8号窯跡出土遺物



第23図 9号窯跡

ていない。

【重複関係】 5号窯跡と重複し、これより新しい。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部からなる半下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ3.75m (窯体3.75m以上)

焼成部…2.24m以上 最大幅……1.32m

遺存高…0.27m

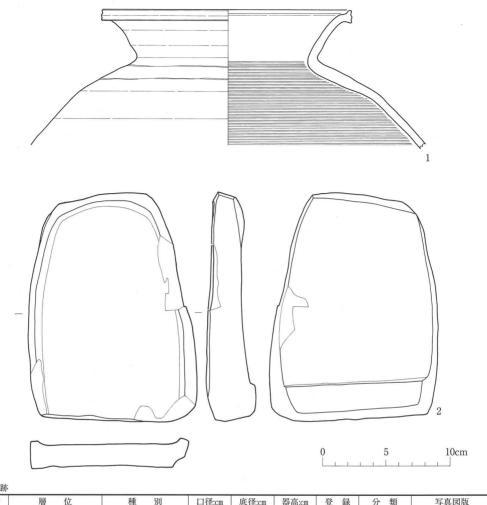
燃焼部…1.51m以上

焼成部境幅…0.97m

焚口幅…不明

遺存高…0.35m

前庭部…なし?



9号窯跡

番号	層 位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	床	須恵器甕	(19.8)	(31.2)	(10.8)	9-2		
2	埋土	硯	幅13.2	長さ18.4	厚さ3.8			8 - 8 - 1

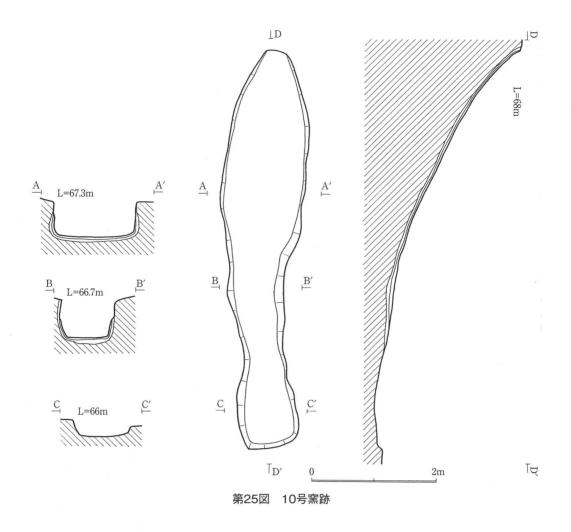
第24図 9号窯跡出土遺物

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん膨らんで、窯尻に向かい再び狭くなる。床面は、 窯尻付近で1面認められ、還元→酸化している。傾斜は23°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部に対してくびれ、焼成部境から手前に先細り気味になる。床面は 1面で、還元→酸化している。傾斜は12°を測る。

【前庭部】不明。



【出土遺物】須恵器甕1点、短頸壺1点、風字硯1点を図示した。

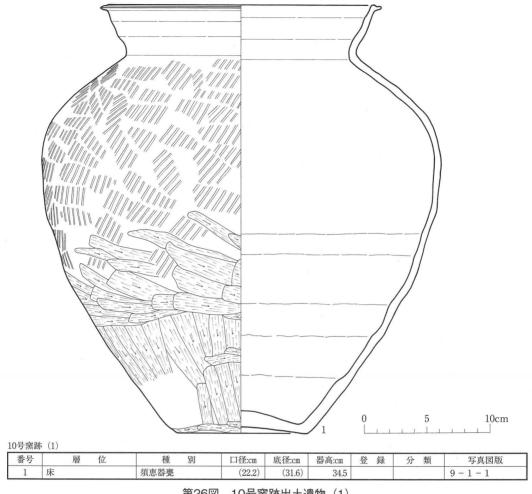
須恵器甕(第24図1)床面から出土した、「く」字状に屈曲する口頸部片である。内面にカキ目が残る。

須恵器短頸壺(第42図3)前庭部埋土から出土した、口縁部~胴部肩片である。つくりが薄く、小型品になると思われる。

須恵器風字硯(第24図2)埋土から出土した、完形品である。

10号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高 $66.0\sim68.0$ mラインに横並びした7基(5、 $7\sim12$ 号)の須恵器窯跡のうち、左から2番目のものにあたる。遺存状態は良好であり、窯尻まで確認された。



第26図 10号窯跡出土遺物(1)

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる半下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ6.40m(窯体4.80m)

焼成部…長さ3.30m以上 最大幅……·1.20m

遺存高…0.58m

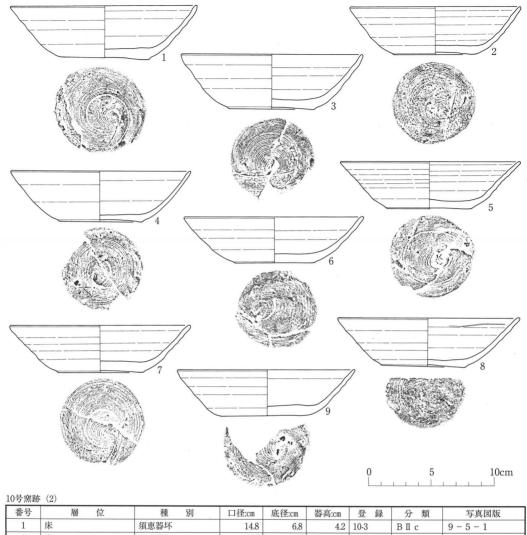
燃焼部…長さ1.50m以上 焼成部境幅…0.70m 焚口幅…0.50m 遺存高…0.64m

前庭部…長さ1.60m

【煙道部】底面は、焼成部と同じ傾斜のまま移行している。このことから、奥部開口型と判断 される。

【焼成部】平面形は槍先形を呈し、最大幅の位置は、ほぼ中位に求められる。床面は1面認め られ、還元→酸化している。縦断面形は弓なりで、傾斜は平均26°を測る。

【燃焼部】平面形は燃焼部に対してくびれ、焼成部境から、先細り気味となる。床面は1面で、



番号	層	位	種	别	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	床		須恵器坏		14.8	6.8	4.2	10-3	ВІІс	9 - 5 - 1
2	床		須恵器坏		13.6	6.7	3.8	10-2	СПс	9 - 4 - 1
3	床		須恵器坏		14.4	6.7	4.4	10-6	СІІс	9 - 2 - 2
4	床		須恵器坏		(14.3)	6.6	4.1	10-5	СІІс	
5	床		須恵器坏		14.2	6.7	3.7	10-7	СПс	9 - 3 - 2
6	床		須恵器坏		14.4	6.4	3.7	10-8	СІІс	9 - 2 - 1
7	床		須恵器坏		14.4	6.8	3.8	10-1	СІІс	9 - 3 - 1
8	床		須恵器坏		14.4	6.7	3.9	10-9	СІІс	9 - 5 - 2
9	床		須恵器坏		(14)	6.6	3.7	10-4	СИс	

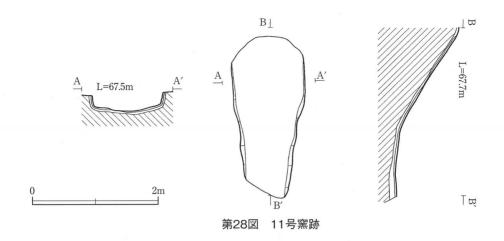
第27図 10号窯跡出土遺物(2)

底面は還元→酸化していた。傾斜は7°を測る。

【前庭部】燃焼部に対して、やや幅の広い方形を呈する。底面高は、燃焼部より若干低い。

【出土遺物】須恵器坏9点、甕1点を図示した。

須恵器坏(第27図1~9) いずれも床面から出土した。器形は、「坏形」と「椀形」の中間形



態を呈し、底部は回転糸切り無調整である。

須恵器甕(第26図1) 床から出土した。平底の中型品で、口縁部端が、水平面をなすのが特 徴的である。胴部最大径は中位より上にあり、肩が張る。器面には、外面上半に平行叩き目、 下半に手持ちヘラケズリの痕跡が観察される。

11号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基(5、7 ~12号) の須恵器窯跡のうち、左端のものにあたる。遺存状態は、窯尻と焼成部下端が失われ ていた。しかし、周辺地形の状況を勘案すると、小規模窯であった可能性が高いと思われる。

【重複関係】なし。

【窯体構造】半下式窖窯と推定される。

【遺存規模】全体……長さ2.56m以上(窯体2.56m以上)

焼成部…長さ1.23m以上 最大幅……不明

遺存高…0.31m

燃焼部…長さ1.33m以上 焼成部境幅…0.84m 焚口幅…不明

遺存高…0.28m

前庭部…不明

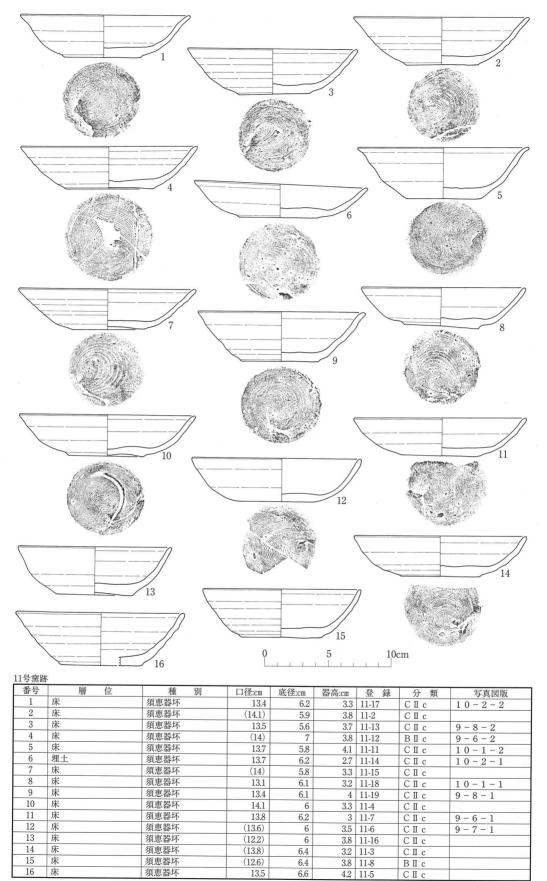
【煙道部】不明。

【焼成部】平面形は、焼成部境から奥に向かって幅広になっている。床面は1面認められ、還 元→酸化していた。傾斜は急で、32°を測る。

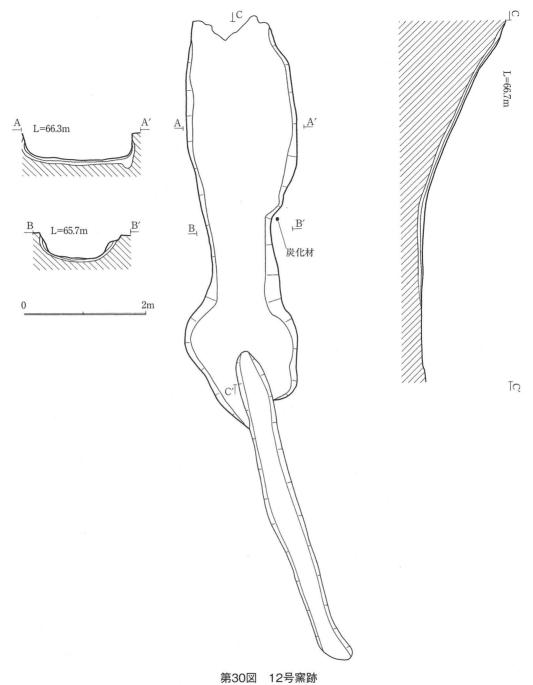
【燃焼部】平面形は焼成部境から、先細り気味となる。底面は還元→酸化しており、傾斜はほ ぼ水平の1°を測る。

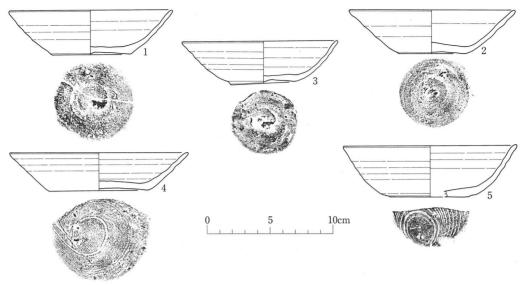
【前庭部】不明。

【出土遺物】須恵器坏14点、甕1点を図示した。



第29図 11号窯跡出土遺物





12号窯跡

番号	層 位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	床	須恵器坏	(13.2)	6.4	3.6	12-4	СІс	10 - 3 - 1
2	床	須恵器坏	(13.4)	5.5	3.5	12-2	СІс	
3	床	須恵器坏	12.4	5.1	3.4	12-5	СІс	10-3-2
4	床	須恵器坏	14.3	7.8	3.1	12-3	СІІс	
5	床	須恵器坏	(13.9)	(6.2)	4.1	12-1	СІІс	

第31図 12号窯跡出土遺物

須恵器坏(第29図1~16)いずれも床面に密着して出土したものである。器形は「椀形」を呈し、 口径/底径比・口径/器高比が小さく、底部が回転糸切り無調整という点で、斉一性が認めら れる。

須恵器甕(第42図1)床面から出土した。頸部が「く」字状を呈し、口縁部端は上下に挽き出 されている。胴部外面に叩き目、内面に当て目が残る。

12号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基(5、7 ~12号)の須恵器窯跡のうち、右から2番目のものにあたる。遺存状態は、窯尻が削平を受け、 確認できなかった。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部、外延排水溝からなる半下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ10.63m以上(窯体4.90m以上)

焼成部…長さ3.30m以上 最大幅……1.58m

遺存高…0.42m

燃焼部…長さ1.60m

焼成部境幅…0.88m 焚口幅…0.78m

遺存高…0.40m

前庭部…長さ1.73m

最大幅…1.60m

【煙道部】床面は、窯尻近くまで、ほぼ焼成部と同じ傾斜のまま立ち上がる。このことから、 奥部開口型と推定される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広になり、また先細りになる。床面は1面認め られ、還元→酸化していた。傾斜は25°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部に対してくびれ、焼成部境とほぼ同じ幅で手前に伸びる。床面は 1 面で、還元→酸化していた。傾斜は、ほぼ水平の1°を測る。焼成部境の右側壁から、構架 材が1個検出されている。

【前庭部】平面形は、焼成部より幅広になり、底面は連続してほぼ水平面をなす。

【外延排水溝】前庭部中央から、斜面下に細長く延伸している。主軸方向は沢の中心を向き、 窯体より右にずれている。長さ5.20m、幅41~45cm、検出面からの深さ3~28cmを測る。

【出土遺物】須恵器坏5点を図示した。

須恵器坏(第31図)いずれも床面から出土した。器形は「坏形」(4ほか)と「椀形」(3ほか) が混在する。しかし、口径/底径比と口径/器高比が小さいこと、また、底部が回転糸切り無 調整という点に、共通性が認められる。

13号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。これまで記述した、同地点の7基(5、7~12号) の須恵器窯跡の位置より標高の高い、70.0mラインに単独で分布している。右脇に、1号住居 跡がある。遺存状態は良好であった。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる地下式窖窯である。

【遺存規模】全体……長さ8.68m(窯体5.60m)

焼成部…長さ3.80m

最大幅……1.80m

遺存高…0.60m

燃焼部…長さ1.80m 焼成部境幅…1.30m 焚口幅…1.17m

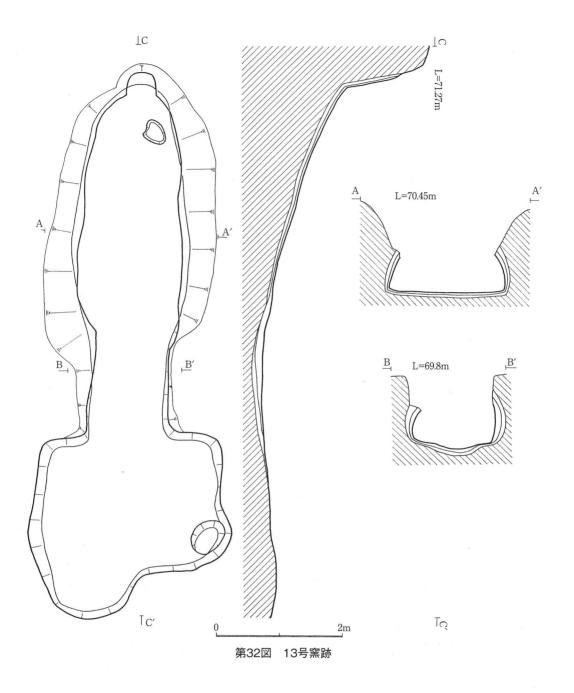
遺存高…1.32m

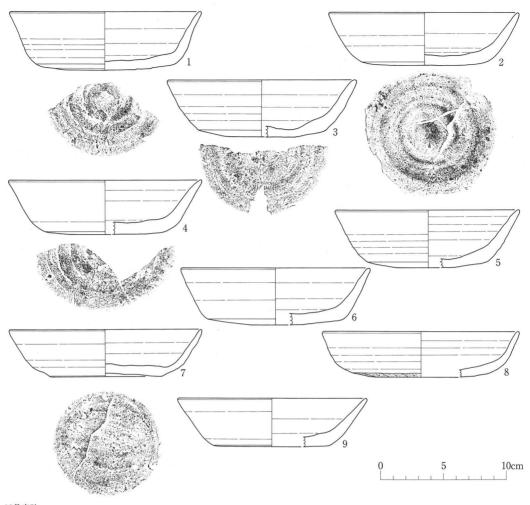
前庭部…長さ2.70m 最大幅…2.93m

【煙道部】直立煙道で、主軸から右へ、ややずれた位置にある。奥壁は窯尻から38cm突出し、 幅38cm、遺存高152cmを測る。

【焼成部】平面形はずんぐりした槍先形をなし、最大幅の位置は、中位より手前に求められる。 この点で、同じ地下式窖窯の5号窯跡との違いが指摘される。床面は、1面認められ、還元→ 酸化していた。縦断面形はやや弓なりで、傾斜は17~21°を測る。また、横断面形は、「かまぼ こし形をなす。

【燃焼部】平面形は、燃焼部に対して明瞭にくびれ、焼成部境と同じ幅の方形をなす。床面は





1	2	\Box	空	D-7	

番号	層位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	床面	須恵器坏	(14.2)	(11)	4.6	13-11	A 2 I b	
2	床面	須恵器坏	(15)	10	4.3	13-2	A 2 I b	10 - 5 - 1
3	床面	須恵器坏	15	10	4.6	13-5	A 2 I b	10-4-2
4	床面	須恵器坏	(15.3)	9.5	4.4	13-3	A 2 I b	10-5-2
5	前庭埋土	須恵器坏	(14.6)	(9.5)	4.7	13-1	A 2 I b	10 - 4 - 1
6	前庭埋土	須恵器坏	(15)	(10.8)	4.7	13-4	A 2 I b	10 - 7 - 1
7	床面	須恵器坏	15.3	8.7	3.8	13-6	A 2 I b	10 - 6 - 1
8	床面	須恵器坏	(15.6)	(11)	3.7	13-7	A 2 I b	
9	埋土	須恵器坏	(15)	(9.3)	3.9	13-8	A 2 I b	

内面に×

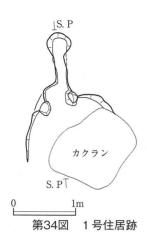
第33図 13号窯跡出土遺物

1 面で、還元→酸化していた。底面傾斜は12°を測り、断面形は「かまぼこ」形を呈する。

【前庭部】奥壁がきれいに角張って、横長の方形基調をなす。底面は、燃焼部の連続で、焚口 手前60cmの範囲まで酸化していた。傾斜は、奥に向かって4°逆傾斜している。

【出土遺物】須恵器坏9点を図示した。出土状況は一定していないが、器形・細部特徴に斉一性がみられる。したがって、すべて共伴資料と見做せる。

領恵器坏(第33図 $1\sim9$) $5\cdot6\cdot9$ は埋土、他は床面から出土した。器形の特徴は、口径/



底径比が大きく、底部は、丸底風平底ないし平底をなす。また、 全体に器壁が厚い点も、目立った特徴といえる。底部痕跡は、手 持ちヘラケズリが施される7を除き、すべて回転ヘラ切り無調整 である。

竪穴住居跡

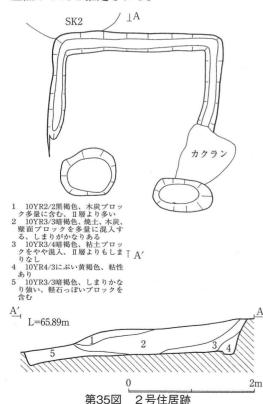
2 軒検出された。どちらも、須恵器窯跡の脇に立地し、通常の 当該遺構に比べて規模が小さい。このことから、性格は須恵器生 産に伴う工房ないし窯焚き時の仮設作業小屋と想定される。

1号住居跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。13号窯跡の右脇にある。斜面下半分は、床面が遺存しない。

【重複関係】なし。

【平面形・規模】方形を呈し、遺存長で、1.30m×1.30mを測る。実際の規模も、ほぼこれと大 差無かったと推定される。

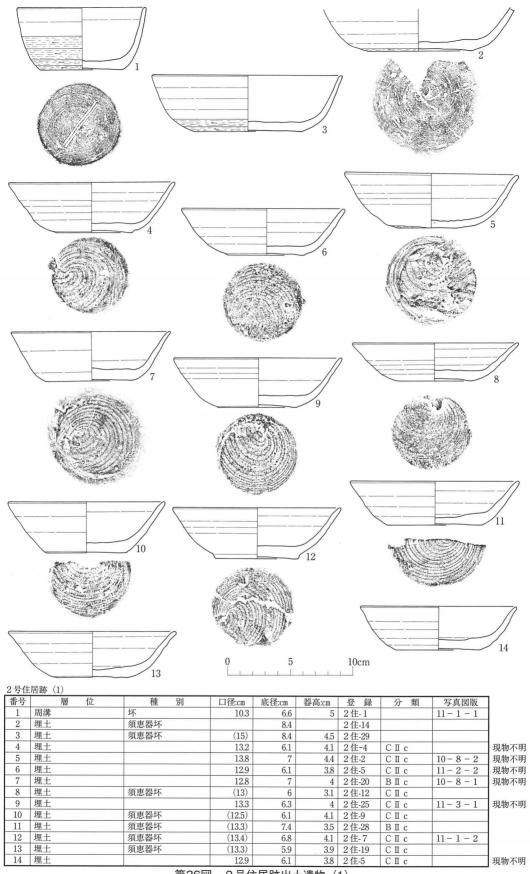


【カマド】南西隅に付設されていた。構造的には、集落内住居のカマドと、何ら変わりは無い。煙道が斜面上に、1.12m直線的に伸び、先端はピット状をなす。

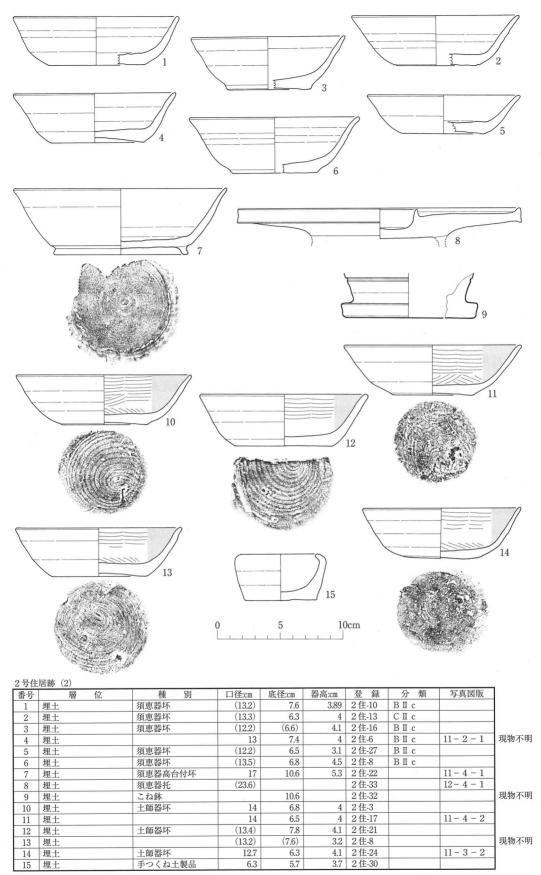
【出土遺物】土師器甕1点を図示した。 土師器甕(第43図1)出土層位不明の完形品 である。器形の最大径位置は、口縁部に求め られる。

2号住居跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。 4号窯跡の右下脇、2号土坑の斜面真下に営まれている。下半分は、床面が遺存しない。 【重複関係】南西隅で、2号土坑とわずかに 重複している。しかし、層位的な新旧は、記録が残されていないため、不明である。



2号住居跡出土遺物(1) 第36図



第37図 2号住居跡出土遺物(2)

【堆積土】 4層に分層された。このうち、第1・2層は焼土・炭・窯壁片が充満し、明らかに 須恵器窯の2次堆積物と判断される。具体的には、位置関係と出土遺物の内容から、主に4号 窯跡の可能性が高いと思われる。

【平面形・規模】方形を呈している。規模は、東西2.77m、南北3.53m以上を測る。

【カマド】遺存範囲では、確認されていない。

【周溝】壁直下に、設けられている。幅23~29cm、床面からの深さ6~8cmを測る。

【ピット】2基検出された。P1は、74×90cm、検出面からの深さ16cm、P2は、53×97cm、床面からの深さ25cmを測る。ロクロピットや白色粘土溜の可能性もあるが、堆積土が記録されておらず、性格不明である。

【出土遺物】須恵器坏20点、高台坏1点、托1点、こね鉢1点、土師器坏5点、ミニチュア土器1点を図示した。出土状況は、第36図1を除くとすべて埋土出土であり、多量に出土した須恵器は、4号窯跡などからの流れ込みが主体と推定される。それに対して、土師器坏はその可能性は無いので、本住居跡に伴う可能性が高いと思われる。

須恵器坏(第36図1~14、第37図1~6)大別して、底径/口径比が大きく、切り離し不明→回転へラケズリのグループ(第36図1~3)と、底径/口径比が小さめで、回転糸切りないし回転へラ切り?→無調整のグループ(第36図4~14、第37図1~6)に区分される。後者は、回転糸切り底主体で、回転へラ切り?底のものに対して、底径/口径比が小さい傾向が認められる。

須恵器高台坏(第37図7)坏部の器形は、底径/口径比が大きく、口縁部~体部が外傾して立ち上がる。高台部は角高台で、短い。口縁部の外反が弱い点が気になるが、黒笹14号窯式の灰釉陶器椀の影響が感じられる。

須恵器托(第37図8)口縁部内面にミガキが施され、隆帯が巡ることから、托と判断した。高 台は欠損している。

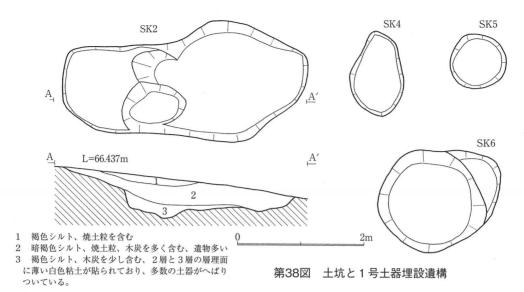
須恵器こね鉢(第37図9)底部片になる。刺突は認められない。

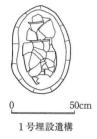
土師器坏(第37図 $10\sim14$)いずれも底部が分厚く、回転糸切り底である。このうち、14は手持ちヘラケズリが施されている。また、逆台形の $12\cdot13$ は、底部内面のミガキが井桁状に施され、技術的に古相を示す。

ミニチュア土器 (第37図15) 口縁部が内傾した、平底鉢形を呈している。

土器埋設遺構

1 基検出された。調査時はカメ棺墓に登録されたが、ここでは、性格を特定しない遺構名称に変更した。





1号土器埋設遺構

【位置・遺存状態】現地説明会資料に、「調査区南側の窯跡東側で発見された」と記述されている。しかし、具体的な位置は不明。遺存状態は良好である。

【重複関係】なし。

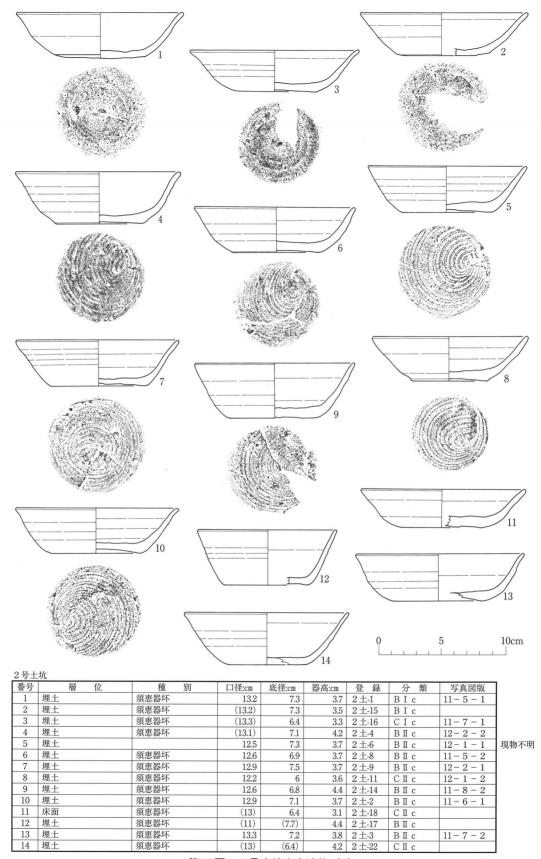
【平面形・規模】平面形は楕円形を呈し、規模は、1.43m×0.95mを測る。検出面からの深さは、不明である。

【出土遺物】土師器甕3個体が、合わせられた状態で出土している。しかし、うち2点の実物ならびに実測図が所在不明となっている。

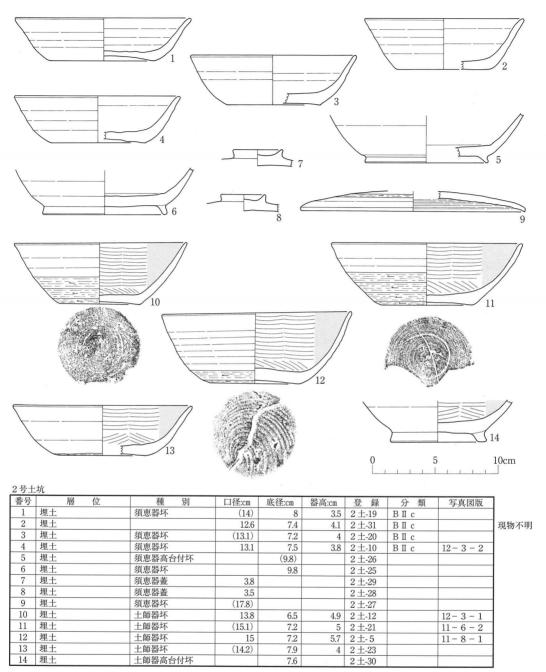
土坑

現地説明会資料によると、これまで記述した遺構の他にも、「土坑3基・焼土遺構3基が発見された」とある。しかし、現在、原図と図版で確認できるのは、土坑5基(1、 $4\sim6$ 号土坑)である。おそらく、焼土遺構は調査の過程で最終的に土坑に含められたと思われる。しかし、数が合わず、また、焼土遺構とされていたものがどれなのか、実測図に被熱痕跡の記録が無く、カラー写真も所在不明のため、特定できない。

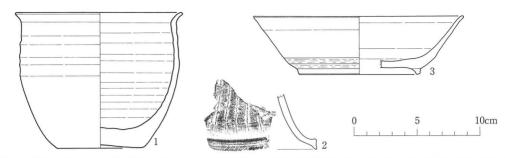
以下、詳細な記録の残る 2 号土坑と、平面図しか確認できない 1 、 $4\sim 6$ 号土坑に分けて報告する。



第39図 2号土坑出土遺物(1)



第40図 2号土坑出土遺物(2)



番号	層 位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1	SI1	土師器甕	13.3	7.0	10.8			
2		円面硯						
3		須恵器高台坏	16.6	9.7	4.7			

第41図 その他の出土遺物(1)

4~6号土坑

【位置】いずれも北集中区で検出された(第38図参照)。

【平面形】 1 号…長楕円形 4 号…不整形

5号…円形 6号…円形

【規模】1号···1.92m×0.70m 4号···1.37m×0.87m 5号···0.87m×0.86m

6号···1.75m×1.74m

【深 さ】1号…0.16m 他は不明。

【遺物】すべて不明。

2号十坑

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。遺存状態は良好である。

【重複関係】下端で2号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明。

【平面形・規模】縦長の楕円形基調を呈している。規模は大型で、3.86m×2.00m、最深部の検 出面からの深さは0.49mを測る。底面は斜面上位の西壁側がテラス状に浅くなっている。

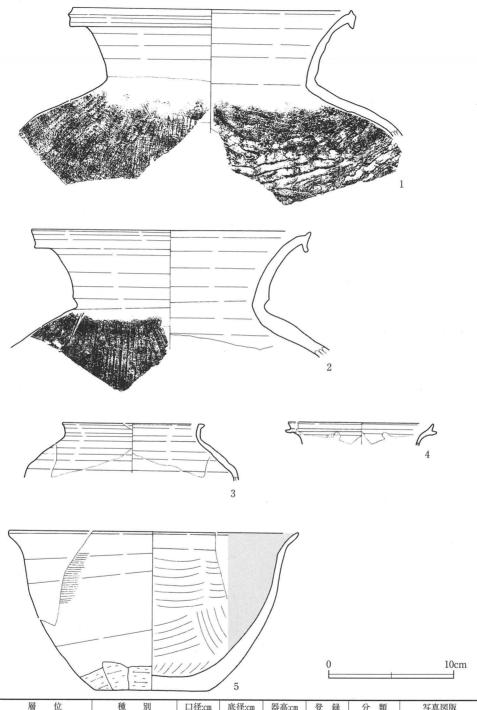
【堆積土】3層に分層された。このうち第2~第3層の層理面で、多量の土器がへばりついた 状態で認められた。

【出土遺物】須恵器坏18点、高台坏2点、蓋3点、土師器坏4点、高台坏1点を図示した。遺 物様相は、全体的に2号住居跡と類似している。

須恵器坏 (第39、40図 $1\sim4$)確認できる底部痕跡は、ヘラ切り無調整のもの (第39図 $1\sim3$) と、回転糸切り無調性(第39図4~10)の2種類がみられる。器形は、「坏形」主体で、底径 /口径比は、大部分が0.50を上回る。

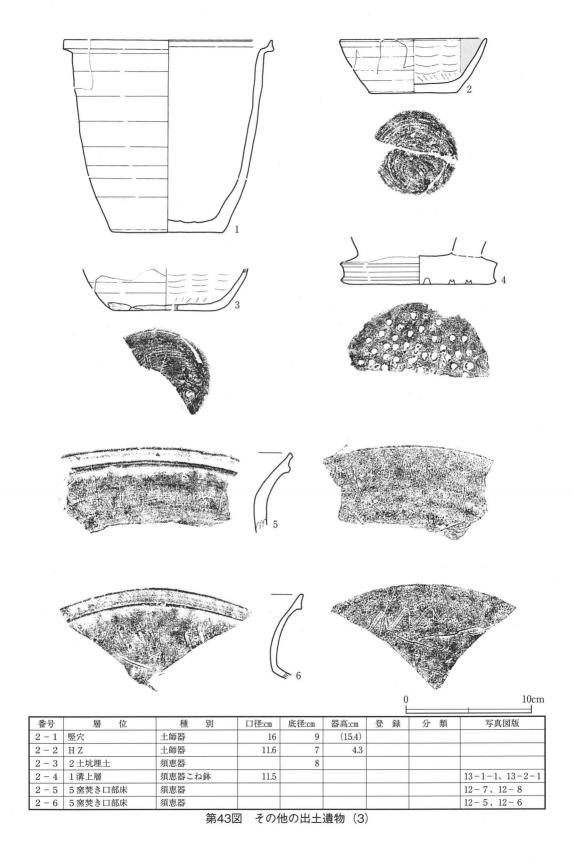
須恵器高台坏(第40図5・6)底径/口径比が大きく、短い角高台が付く。

須恵器蓋(第40図7~9)7・8は環状つまみ、9は器高の低い天井部である。



番号	層位	種 別	口径:cm	底径:cm	器高:cm	登 録	分 類	写真図版
1 - 1	11窯床	須恵器甕	(22.0)					
1 - 2	南2窯東側クロ灰原	須恵器甕	(22.0)					
1 - 3	9窯前庭部埋土	須恵器壺	(11.0)					
1 - 4	北区調査区東側	須恵器壺	(11.5)					1 3 - 3
1 - 5	ΗZ	土師器鉢	23	9	12.6			

第42図 その他の出土遺物 (2)



土師器坏(第40図10~13、第43図3)器高/底径比に幅はあるが、いずれも「坏形」を呈し、 回転糸切り→回転ヘラケズリで共通する。

土師器高台坏(第40図14) 底径が小さめで、角高台が付く。

その他の遺物

ここでは、遺構外と帰属不明の遺構出土遺物を一括して扱う。

須恵器高台坏(第41図3) 出土位置・層位不明。坏部は、口径/底径比が大きく、口縁部~ 体部が直線的に外傾する。高台部は短い角高台である。

須恵器甕(第42図2、第44図1) 第42図2は、遺物カードに「南2窯東側クロ灰原」と記録されている。しかし、具体的な帰属遺構、位置は不明。頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部端は下に大きく挽き出されている。胴部外面に叩き目が観察される。第44図1は、甕の口縁部片である。内外面に波状文が施されている。

須恵器壺(第42図4)「北区調査区東側」から出土した。しかし、具体的位置・層位不明。口 縁部しか残存しないが、緻密な胎土・堅緻な焼成から、5世紀の製品とみられる。

須恵器円面硯(第41図2、第44図2) 脚部片である。外面に平行沈線がみられる。

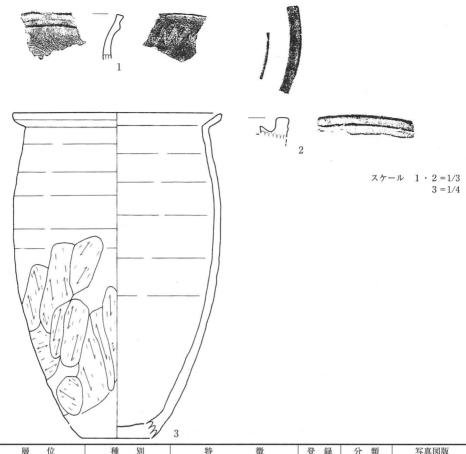
土師器甕(第41図1) 口縁部が短く外反する小甕である。

土師器鉢(第42図5) 平底で、内彎して立ち上がる体部から、口縁部が短く外反する。

石製品(第45図1) 硯のミニチュアだろうか。直方体を呈し、片面周縁に溝が掘り込まれている。

鉄砲玉(第45図2) 1点出土している。やや歪な球形である。表面が白い粉をふいたようになっている。

石鏃(第45図3) 三角形を呈し、先端を欠く。



番号	層 位	種 別	特 徴	登 録	分 類	写真図版
3 - 1	HZ BS-2 2層	須恵器甕	内外面に波状文、外面に隆帯			
番号	層 位	種 別	口径:cm 底径:cm 器高:cm	登 録	分 類	写真図版
3 - 2	2 調査区北側東 円面硯		(16.6)			13-2-2
番号	層位	種 別	口径:cm 底径:cm 器高:cm	登 録	分 類	写真図版
3 - 3	カメ棺	土師器	22.1 (7.2) (34.3)			





第45図 その他の出土遺物 (5)

第5章 考察

八幡坂遺跡の発掘調査で特筆されるのは、奈良~平安時代の須恵器窯跡12基の発見と、その 豊富な製品の一括資料が得られたことである。調査から20年余り経過した現在も、宮城県南地 方では最大の窯業生産地成果であり、今回、正式報告が実現した意義は大きい。

以下、この点に主眼を置いて、基本事項の検討を行っていく。

1. 遺物の分類

まず、時期変化を最も鋭敏に反映し、資料数の豊富な須恵器坏の分類を行う。対象は、実測資料138点である。

【器形】(大別基準)

A: 底径/口径比0.58~0.80、器高/口径比0.24~0.29。底部は平底状丸底を呈する。モデルは、 飛鳥V~平城 I の奈文研分類坏Aと思われる。

※A1…口縁部下端外面に沈線なし(第47図1・2)。

※A2…口縁部下端外面に沈線あり(同図3)。また、A1より、器高/口径比・口径値がやや小さい傾向がみられる。

B:底径/口径比0.50~0.57、器高/口径比0.25~0.33。底部は平底を呈する。系譜は、逆台形の金属器系「坏形」坏(第47図9・10他)と、瓷器系「椀形」坏の2タイプ(仙台市教育委員会1987)が認められる#1)。両者の比率は、拮抗する。

C: 底径/口径比 $0.41\sim0.49$ 、器高/口径比 $0.20\sim0.30$ 。底部は平底を呈する。系譜は、Bと同じ2タイプである。しかし、比率は「椀形」坏(第47図 $14\cdot25$)の方が、圧倒的優位を占める。

【底部切り離し】(細別基準)

Ⅰ:回転ヘラ切り Ⅱ:回転糸切り

【再調整】(細別基準)

a:全面回転ヘラケズリ b:手持ちヘラケズリ c:無調整 以上の分類基準を検討資料に当てはめると、次の9類型が設定できる。

A1 I b類…9点 A2 I b類…15点

BIb類···1点 BIc類···5点 BⅡc類···31点 Ba類···1点

CIc類···9点 CⅡc類···66点 Ca類··· 1点

これらのうち、編年作業の根幹となる主要類型は、A 1 I b · A 2 I b · B \blacksquare c · C \blacksquare c 類である。

2. 土器群の設定と相対編年

次に、時間軸設定のため土器群を設定し、相対編年を検討していく。なお、検討材料は窯跡 資料に加えて、住居跡・土坑資料も補完的に扱うことにした。

(1) 土器群の設定

各類型の遺構共伴関係から(第1表)、以下のまとまりが抽出できる。

IA群…A1Ib類とA2Ib類が拮抗

5窯

IB群…A2Ib類のみ

13窯

Ⅱ群…BIb類・BIc類・Ba類の各1点

4 窯

Ⅲ群…ВⅡ c 類・СⅡ c 類の拮抗

3窯・2住・2坑

WA群…CIc類2点·Ca類1点·BIc類1点 WB群…CIc類·CⅡc類拮抗 2窯 12窯

Ⅳ C 群… C Ⅱ c 類のみ、ないし主体

1 · 10 · 11窯

V群…器高/底径比の小さい坏を伴う

8窯

さらに、ここでは坏を欠いているが、特徴的な高台坏を伴う8号窯跡資料をVI群として加える。そして、それぞれを、IA群土器、IB群土器、II群土器、II群土器、IVA群土器、VB群土器、VC群土器、V群土器と読み替えることにする。

	1窯	2窯	3窯	4窯	5窯	10窯	11窯	12窯	13窯	2住	2 坑	計
口径平均	13.1	12.9	12.8	13.4	14.4	14.3	13.5	13.4	15.2	13.1	13	
口径/底径比平均	0.49	0.47	0.47	0.53	0.71	0.47	0.45	0.46	0.67	0.5	0.54	
口径/器高比平均	0.29	0.3	0.31	0.28	0.27	0.27	0.26	0.26	0.29	0.3	0.29	
Allb					9							9
А2ІЬ					6				9			15
ВІЬ				1								1
ВІс		1	1	1							2	5
ВПс	3		7				2			7	12	31
Ва				1								1
СІс		2	3					3			1	9
СПс	7		21			9	14	2		10	3	66
Са		1										1
計	10	4	32	3	15	9	16	5	9	17	18	138

第1表 遺構共伴関係

(2) 相対編年の検討

次に、遺構の重複関係を確認すると、発掘調査では、次の古→新の関係が捉えられた。

(i) 2号窯跡→1号窯跡

(ii) 5 号窯跡→ 9 号窯跡

(iii) 7号窯跡→8号窯跡

このうち(i)の所見から、WA群土器 $\to WC$ 土器群の関係が導き出せる。しかし、残る(ii)・(iii)では、片方ないし両方の須恵器窯跡に分類可能な坏が伴わず、これ以上の情報は得られない。

そこで、二次的にこれまでの研究成果(柳澤1994、村田1995、吾妻2001他)を援用することにしたい。奈良~平安時代の須恵器坏は、口径/底径比の縮小($A \to B \to C$)、底部切り離し

の移行(I → II)、底部再調整の省略(a · b → c) の漸移的変化がみられ、さらに、9世紀末 から皿形形態が顕在化し、10世紀に入ると、急激に衰退していくことが明らかにされている。

こうした視点により、本遺跡の土器群には、次の相対編年が考えられる。

「期「IA・IB・V群土器」→Ⅲ期 [Ⅱ・NA群土器]→Ⅲ期 [Ⅲ・NC群土器]→N期 「NB・NC群十器]

以上のうち、Ⅲ期は前半と後半に段階区分する。

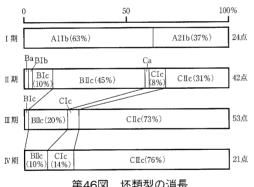
3. 各期の土器様相

ここでは、坏の主要類型の消長に主眼を置き、各期の様相を具体的にみていく。

【Ⅰ期】5・8・13号窯跡の出土資料を基礎とする(ⅠA・ⅠB・Ⅴ群土器)。

生産器種には、坏・高台坏・椀・蓋・甕が確認される。坏は、主要類型であるA1Ib・A 2 I b 類の単純な類型構成がみられる (第46図)。両者は、口縁部沈線の有無に違いが認めら れるものの、基本器形と製作技術は同一である。また、口径値が大きく(14~15cm台)、後続 期と開きがある点も共通する。

ただ、5号窯跡の製品は、器壁が薄くシャープなのに対し、13号窯跡の製品は、ぼってりし



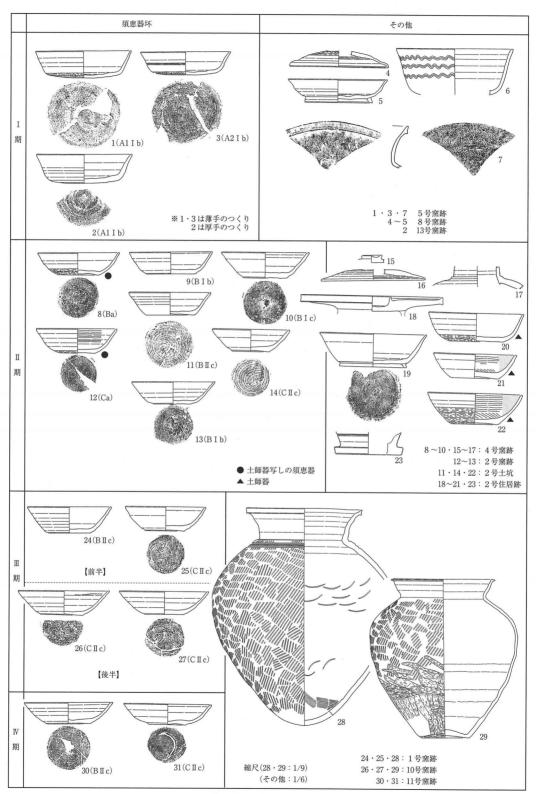
第46図 坏類型の消長

てぶ厚い。また、5号窯跡では、2類型がほぼ 拮抗して生産されるのに対し(3:2)、13号 窯跡では、A1Ib類が単独で生産される。さ らに、8号窯跡では坏の替わりに、坏A1Ib 類を高台に乗せた高台坏(第47図4)が生産さ れ、窯単位で食膳具の器種・類型構成が違い、 5・13号窯跡間では、技術レベル差のある別工 人の製品が焼成されたことを示す。

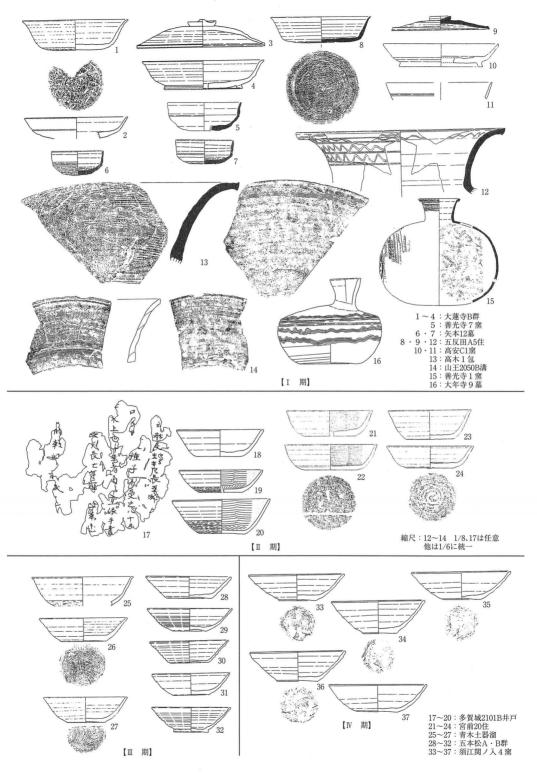
他の器種をみると、高台坏とセットの蓋は、既に内面のカエリが消失している(同図4)。 また、5号窯跡の椀は口縁部外面、甕は口縁部内外面に波状文が巡り、過剰な装飾傾向が指摘 できる(同図5・6)。

【Ⅱ期】2·4号窯跡の出土資料を基礎とする(Ⅱ·ⅣA群土器)。さらに、数量不足を補うた め、2号住居跡、2号土坑の出土資料(Ⅲ群土器)を補完材料とした。この補完材料には、基 礎資料に類似した須恵器坏が定量みられ、共伴した土師器坏(第47図22)にも、基本器形・製 作技術に互換性のある個体が含まれる(第47図8・12)。

なお、2号窯跡の須恵器坏は口径/底径比の様子(第1表)から、4号窯跡のものより後出 の可能性が考えられる。しかし、わずか4点の発掘資料が組成全体を反映している保証は無い



第47図 土器群の変遷



第48図 類例集成

ので、Ⅲ期のように前半・後半の区分はしない。

当該期の生産器種には、坏・高台坏・蓋・托・長頸瓶・こね鉢が確認される。製品様相は、 I期と大きく異なり、一定の断絶期間を挟んだことが窺える。

一新された当該期の坏は、主要類型のB II c · C II c 類が拮抗し(4:3)、全体の76パーセントを占める状況がみられる。また、低比率ながら、Ba · B I b · B I c · Ca · C I c 類を加えた多様な類型構成である点も、重要である(第46図)。全体でみると、I 期に対して、口径値が小さくなり(12~13cm台)、底部形態は平底に画一化している。また、底部切り離しは、回転糸切りが回転へラ切りを圧倒し(17:8)、無調整の比率が95%に達した。系譜は、金属器系「坏形」坏の方が優位である。

他の器種をみると、高台坏(第47図19)は、スケールアップした坏BIb類(同図9)を高台に乗せた器形を呈し、伴う蓋は、つぶれた宝珠形のつまみが付く。長頸瓶(同図17)は、頸部環状凸帯付タイプ(利部1998)がみられる。托(同図18)は1点のみであるが、口径23cmの大型品は、全国的にも稀と思われる。おそらく、寺院ないし在地有力豪族の特注品であろう。口縁部内面には、モデルの金属器を意識した、丁寧なヘラミガキが観察できる。他に、胴部下端付近に沈線が巡るこね鉢(同図23)がある。

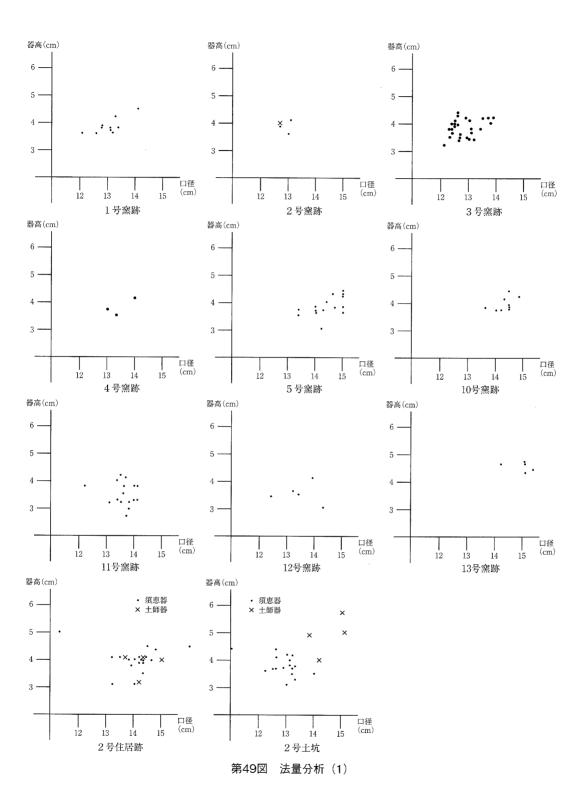
【Ⅲ期】当該期は、前半と後半に段階区分される。大枠を示すと、坏の主要類型変化は、BⅡc類の減少⇔CⅡc類の増加に現れる(2:7)。また、その他の類型もBIc・CIc類に減少し、系譜は主客逆転で、瓷器系「椀形」坏の方が優位となる(第46図)。さらに、製作技術では、回転糸切りの徹底、再調整の完全無調整化、内面仕上げの全面転換(ユビナデ調整→コテ当て調整)が認められる。高台坏・蓋のセットは、組成から脱落した。

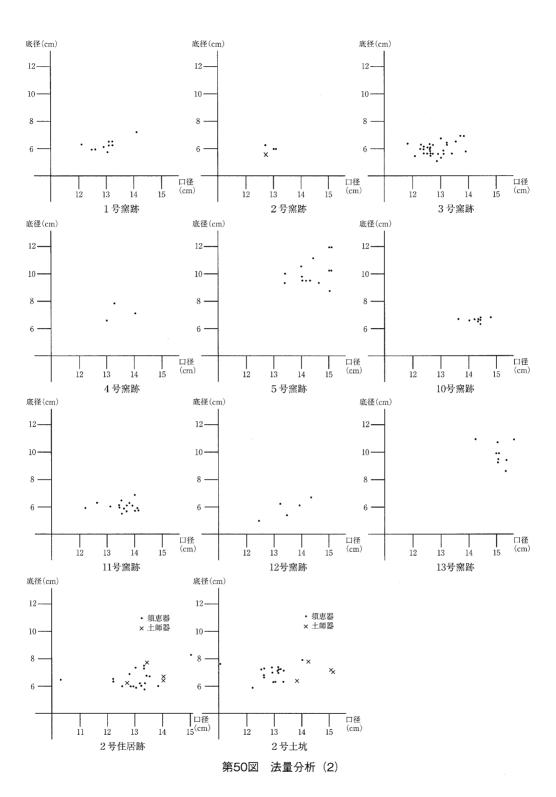
前半:1・3号窯跡の出土資料を基礎とする(Ⅲ・Ⅳ C 土器群)。生産器種には、坏・甕は確認される。坏は、まだⅡ期の製品に類似するものが定量混じる。甕は、器高50cm弱の丸底大型品である(同図28)。

後半:10号窯跡の出土資料を基礎とする(IV C群土器)。生産器種には、坏・甕が確認される。坏は、器高/口径比が小さめに変化し始め、IV 期につながっていく。甕は、器高30cm強の平底中型品で、口縁部上端が水平面をなす(同図29)。

【IV期】11・12号窯跡の出土資料を基礎とする(IVB・IVC土器群)。

生産器種には、坏・甕が確認される。坏の主要類型変化は、BⅡc類の減少⇔CⅡc類の増加がさらに進行し(1:8)、その他の類型は、CⅠc類だけが残る(第D図)。その結果、系譜は瓷器系「椀形」坏が圧倒的優位に立ち、器形は扁平に皿形化したものや、底径/口径比の著しく縮小したものが顕著となった。一方で、底部切り離し技術には窯ごとの個性が反映される。11号窯跡では、回転糸切りに画一化されるのに対し、12号窯跡では回転へラ切りが根強く





残る。甕は、器高50cm前後の大型品になると推定される(第42図1)。

以上をまとめると、坏の主要類型は、 I 期が A 1 I b · A 2 I b 類で構成され、 $II \sim IV$ 期は、 B II c 類の減少⇔ C II c 類の増加によって、漸移的に変化していくことが明らかとなった。 つまり、土器様相は I 期と II 期の間に断絶があり、 $II \sim IV$ 期は連続的である。このことは、各期の年代的な相互関係を反映していると推測される。

4. 各期の実年代

では、具体的に実年代を検討したい。

(1) I期

検討材料として、次の所見が認められる。

- a): 坏1 I b類の類例は、8世紀初頭の窯跡・工人集落跡資料にみられ(第48図1・8)、いずれも組成で主体をなす状況が認められる。
- b): しかし、多賀城創建期の8世紀前半になると平底坏に駆逐され、ほとんど消滅してしまう。
- c):上の事例のうち大蓮寺5号窯跡B群では、内面のカエリが消失した蓋が確認され、セットの高台坏にも、類例(同図4)がみられる。
- d): 坏A2 I b 類の類例は、7世紀中葉~後半の窯跡・墳墓資料(同図5~7)→7世紀末葉~8世紀初頭の窯跡資料(同図2・11)等にみられ、法量・形態を変化させながら、継続的展開した様子が認められる***200

このうち、本遺跡の事例が該当するのは、後者である。また、高安C1号窯跡では、高台坏の類例も併焼されている(同図10)

- e) しかし、8世紀前半以降の類例は、見当たらない。
- e):口縁部内外面に波状文を巡らす甕の類例は、7世紀前半~中葉の集落跡資料(同図13・14)や、7世紀末~8世紀初頭の工人集落跡資料(同図12)にみられ、継続展開した様子が認められる。
- f):また、口縁部外面に波状文を巡らす椀の類例は、直接見当たらないが、7世紀前半の窯 跡資料や(同図16)、7世紀後半の墳墓資料で、胴部外面に列点刺突文・波状文を巡らす 瓶類がみられ、類似現象と捉えられる(同図15)。
- g):このような過剰な装飾を施す須恵器は、8世紀前半以降、皆無になる。

以上のことから、 I 期の様相は、 7世紀須恵器様式の最終段階に位置づけられ、 8世紀初頭の実年代が与えられる。

ところで、I期は本遺跡の須恵器生産開始期に位置づけられ、その背景には、刈田郡の建郡 (養老五年:721年)との関係が想定される。つまり、本遺跡の所在する傑山寺丘陵上では、同 じ頃、別地点の兀山窯跡で刈田郡衙(大畑遺跡)創建期の正倉瓦が生産されており(佐々木・ 菊地1985)、郡衙跡の発掘資料中には、八幡坂 I 期の須恵器製品が確認される。_{註3)}こうした 状況証拠から、本遺跡は郡衙整備に伴って、傑山寺丘陵上に複数設置された窯場の1つであっ た可能性が高い。

この仮説が正しいとすれば、I期の実年代は721年±数年のごく短期間に絞り込むことが可能で、須恵器編年研究の貴重な定点資料になると思われる。

また、この年代観は多賀城創建期にきわめて近く、8世紀初頭とはいえ、同前半との橋渡し的な位置づけとなる。多賀城創建期の最古窯(下伊場野窯跡)では、既に製品から7世紀的様相が払しょくされているので(宮城県多賀城跡調査研究所1994)、国府整備を契機として、須恵器製品に大きな変化の起きたことが窺える。

(2) Ⅱ期~Ⅳ期

検討材料として、次の所見が認められる。

- a): Ⅱ期の須恵器坏の類例は、天長9 (832) 年以降作成の漆紙文書 (同図17) と共伴した、多賀城跡資料 (同図18) や、K-14窯式の灰釉陶器と共伴した、集落跡資料などにみられる (仙台市南小泉遺跡22次調査9号住居跡)。さらに、上現は、9世紀初頭の集落跡資料 (同図23・24) や、併行する伊治城跡後半期の資料まで遡ることができる。
- b):上の事例では、補完材料中の土師器坏の類例が共伴し、a)の年代観が補強される(同図19~22)。
- c):Ⅲ期の須恵器坏の類例は、多賀城IV-1期の窯跡資料(同図28~32)や、K-90窯式の 灰釉陶器椀が共伴した、集落跡資料などにみられる(同図25~27)。
- d):Ⅲ期に顕在化した瓷器系「椀形」坏は、9世紀後半以降急増し、連動して、内面コテ当 て調整が普及していくことが明らかにされている(仙台市教育委員会1987)。このことは、 Ⅲ期→Ⅲ期の坏の系譜・製作技術変化と、a) ~ c) の年代観に矛盾しない。
- e): IV期の須恵器坏の類例は、10世紀前半に降下した灰白色火山灰直後の窯跡資料(同図33~37)に、下限が求められる。ただ、古い様相を残す個体(第21図 9・15)が含まれ、そこまで新しくなるとは考えにくい。

以上から、Ⅱ期は9世紀初頭~中葉、Ⅲ期は9世紀後半、Ⅳ期は9世紀末葉~10世紀初頭の 実年代が与えられる。このうちⅡ期は存続期間が他に比べて長く、本来は二分すべきと考えられる。しかし、十分な窯跡資料数に恵まれず、今後の増加を待つほかない。

5. 須恵器窯構造の変化

次に、これまでとは視点を変え、須恵器窯構造の変化をみていきたい。

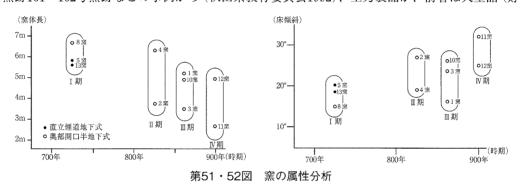
(1) 窯体構築方式

製品と同じように、I期とII期の間に断絶が横たわる。I期は地下式主体(地下式2:半地下式1)なのに対し、II期以降は、半地下式に統一されている(第53図)。この状況は、8世紀中葉を画期に、窯体構築方式が半地下式へ基本転換していく陸奥全体の動きに連動したものと言える(菅原2004・2009、桜井2009)。両者は排煙形態にも違いがみられ、地下式は直立煙道、半地下式は奥部開口型を備える。

ちなみに I 期の半地下式窯は、平面形が短冊状をなす点で、 8 世紀前半 (新) の日の出山窯 跡群 C 地点 4 号窯跡に最も類似している (色麻町教育委員会1993)。

(2) 窯体長と床面傾斜

両者の相関関係には、次の2つの傾向性が指摘できる(第51・52図)。まず1つは、どの時期も、大型・緩傾斜の窯と、小型・急傾斜の窯に2分化していることで、秋田県横手市富ヶ沢窯跡101・102号窯跡などの事例から(秋田県教育委員会1992)、主力製品が、前者は大型品(貯



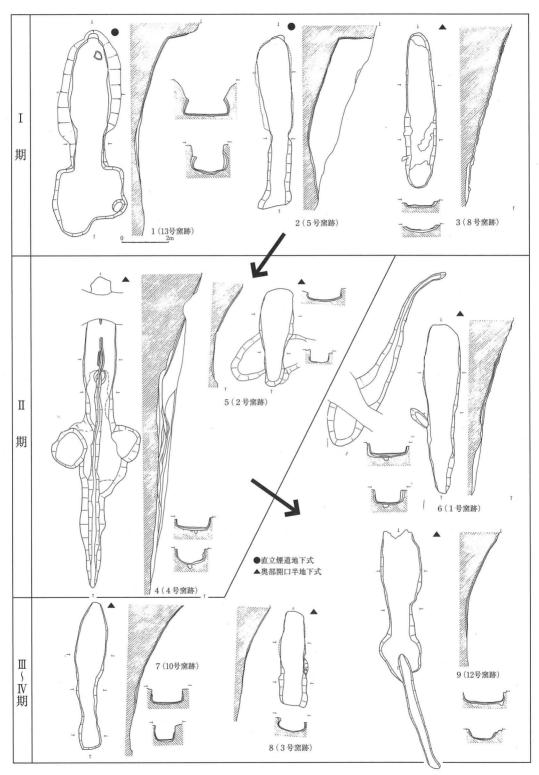
蔵具) +小型品(食膳具)、後者は小型品(食膳具)に区別されていたと考えられる**4)。

A:大型・緩傾斜…8窯(I期)	4窯(Ⅱ期)	1窯(Ⅲ期)	12窯(Ⅳ期)
B:小型・急傾斜…5・13窯(I期)	2窯 (Ⅱ期)	3 · 10窯 (Ⅲ期)	11窯(Ⅳ期)

ただし、Aでも I 期の13号窯跡は、大甕焼成窯特有の幅広な形態を有し(藤原1998 b)、これも例外ではないと思われる。

もう1つは全体の動きとして、時期が新しくなるほど、窯体長が短くなる一方、床面が急傾斜化していく傾向性である。これは「窯体内の温度が均一で、蓄熱性の高い窯」→「火前・火奥の温度差が激しく、冷めやすい窯」の変化を意味し(藤原1998 b)、Ⅳ期には、窯尻側に製品配置される坏が、土師器と区別できないほど軟質化してしまう。

以上の2つが、1つの窯場内でこれほど明確に捉えられたのは、本遺跡が陸奥初例と思われる。それが、どこまで普遍化していたのかは今後の課題であるが、1つの生産地操業モデルを 提供した重要な成果であることは間違いない。



第53図 窯の変遷

6. 窯場景観の変化

須恵器生産関連の考察の最後として、窯場景観の変化を概観しておく。

(1) 丘陵全体の景観

傑山寺丘陵上には、広範囲に窯跡群が形成されていたと推定される。本遺跡と兀山窯跡の中間位置にあたる前山遺跡では、兀山窯跡と別種類の平瓦および須恵器転用焼き台(写真図版13の7)が採集され、窯跡1基の確認情報がある(白石市史編さん委員会1976、佐々木・菊池1985)。

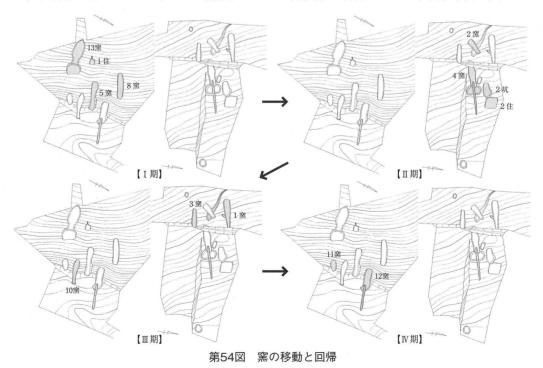
こうしたことから、現在の白石城跡や白石高校一帯にも窯が分布し、未確認の8世紀前半~ 末葉を含めて、継続的な生産が行われていた可能性が考えられる。白石盆地には、他の確実な 古代窯跡は発見されず、ここが、地域中核窯の役割を果たしたと思われる。

(2) 窯の移動と回帰

本遺跡では、北集中区と南集中区で、交互に窯の移動と回帰が繰り返されている(第 I 図)。 とくに II ~ IV 期は、それが継続変遷の中で捉えられ、森林資源の計画的利用が背景に推測される(藤原1998 a)。

(3) 2基並列の配置

Ⅲ期とⅣ期には、前述したA:大型・緩傾斜の窯と、B:小型・急傾斜の窯が、2基並列の位置関係で認められる(1・3号窯跡、11・12号窯跡)。類例は、秋田県横手市富ヶ沢101・



102号窯跡などにみられ、須恵器窯の1つの配置パターンであったと考えられる。

(4) その他の遺構

本遺跡は、現地説明会資料に「焼土遺構が発見された」と記述されており、4~6号土坑が 土師器焼成坑B類に該当する可能性がある(菅原1997)。そうすると、本遺跡の須恵器生産に は、小規模な土師器生産が併設されていたのかも知れない。

また、性格は特定できないが、土器埋設遺構も窯場操業期間の所産と考えられる。

(5) 古代以外の遺物

古代以外の遺物としては石鏃があり、縄文時代と考えられる。近世以降のものとしては、陶磁器があり一覧表に掲載した。鉄砲玉があり、陣屋跡に関連するものと考えられる。また、時期が特定できない石製品が出土している。

第6章 まとめ

- 1 八幡坂遺跡は、白石市中心部の西側の丘陵上に立地する。発掘調査により須恵器窯跡12基、 竪穴住居跡 2 棟、土坑 5 基、土器埋設遺構 1 基が発見された。
- 2 出土した須恵器は共伴関係、型式学的な特徴から I ~ V 群に分けることができる。さらに 遺構の重複関係を踏まえ、 I 期~ IV 期の設定が可能である。
- 3 Ⅰ期は養老五年(721年)前後の8世紀初頭、Ⅱ期は9世紀初めから中葉、Ⅲ期は9世紀 後半、Ⅳ期は9世紀末~10世紀初めの年代と推定される。
- 4 窯の構造は、Ⅰ期は地下式が主体で、Ⅱ期以降は半地下式のみとなる。
- 5 八幡坂遺跡から発見された窯跡は、古代刈田郡における最大の窯跡であり、 I 期の製品は 刈田郡衙と考えられている大畑遺跡に供給されている。
- 6 慶長5年(1600)の伊達政宗による上杉領白石城攻めの陣屋跡に関連すると推定される鉄 砲玉が発見された。

【註】

- 1. 「考察」で示された、小川淳一氏のすぐれた分析成果による。
- 2. 古い段階は陶邑窯、新しい段階は在地土師器坏に、系譜を求める見解がある(菊地1994)。確かに正しいと思われるが、排他的関係ではなく、陶邑窯出自の坏が継続展開していく過程で在地の影響を受けたと考えられる。
- 3. 平成3年度白石市教育委員会の発掘調査資料中で、実見した。ただし、未整理のため、瓦との確実な共伴関係は確認できていない。したがって、郡衙に先行した遺構に伴う可能性もあり、その場合、この前提は崩れてしまう。ただ、蓋の内面のカエリが消失している点から、7世紀末まで遡るとは考えられず、最大でも20年を越えるタイムラグは生じない。資料の公表と併せて、今後の課題となる。
- 4. 相対的に掘り込みが浅い半地下式は、大半の窯尻が欠損していた(第4章参照)。そのため、第51図に示した窯体長は、あくまでも遺存値である。しかし、調査状況の写真を見ると、地表面がさほど削平を受けた様子はなく、周辺地下式窯の煙道高からみても、本来の平面形は概ね保たれていると考えられる。したがって、2タイプの関係は、信頼が置けると判断した。

【引用・参考文献】

片倉信光 1965 『白石城址調査報告書』 白石市文化財調査報告書第4号

涌谷町教育委員会 1974 『長根窯跡群Ⅱ』

国見町教育委員会 1974 「大木戸窯跡群発掘調査報告」『国見町の文化財』

東北学院大学考古学研究部 1975 「鳥屋三角田南地区窯跡発掘調査報告」『温故』第9号

涌谷町教育委員会 1976 『長根窯跡群Ⅲ』

白石市史編さん委員会 1976 『白石市史別巻 考古資料編』

宮城県教育委員会 1981 「東山遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書V」

宮城県教育委員会 1983 「朽木橋横穴古墳群 宮前遺跡」

佐々木和博・菊地逸夫 1985 「白石市兀山遺跡の古瓦」『赤い本 片倉信光氏追悼論文集』赤い本同人会

西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社

白石市教育委員会 1987 『八幡坂遺跡-現地説明会資料-』

宮城県教育委員会 1987 『硯沢・大沢窯跡ほか』

仙台市教育委員会 1987 『五本松窯跡』

(財)福島県文化センター 1989 「善光寺遺跡」『国道113号線バイパス遺跡調査報告』Ⅳ

仙台市教育委員会 1990 『大年寺構穴墓』

宫城県多賀城跡調査研究所 1991 「第60次調査」『多賀城跡調査研究所年報1991』

秋田県教育委員会 1992 「富ヶ沢A・B・C窯跡」『秋田ふるさと村建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』

河南町教育委員会 1993 『須江窯跡群関ノ入遺跡』

仙台市教育委員会 1993 『大連寺窯跡 - 第2・3次 - 』

色麻町教育委員会 1993 『日の出山窯跡群』

福島市教育委員会 1993 『大鳥城跡』

小川淳一 1994 「第二編 原始・古代 第二章 古代」『蔵王町史』通史編

菊地佳子 1994 「多賀城創建以前の陸奥国と須恵器」『歴史』第82輯 東北史学会

仙台市教育委員会 1994 『南小泉遺跡第22・23次発掘調査報告書』

宫城県多賀城跡調査研究所 1994 『下伊場野窯跡群』

柳澤和明 1994 「東北の施釉陶器 - 陸奥を中心に - 」『古代の土器研究 第3回シンポジウム施釉陶器』古代の 土器研究会

(財)福島県文化センター 1995 「正直C遺跡V地点」『母畑地区遺跡発掘調査報告36』

佐藤敏行 1995 「須江窯跡群の窯構造について」『石巻文化センター調査研究報告』第三号

村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号

菅原祥夫 1997 「東北東部 - 古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成坑」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯 跡研究会編 真陽社 福島市教育委員会 1997 『城裏口遺跡』

利部 修 1998 「東北以北の双耳坏と環状凸帯付長頸瓶」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号

藤原 学 1998 a 「燃料材と薪」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』

藤原 学 1998 b 「須恵器窯構造と系譜」『須恵器窯の技術と系譜 - 豊科、信州、そして日本列島』窯跡研究 会

いわき市教育委員会 1999 『五反田A遺跡』

相原淳一 2000 「福岡長袋の分布調査」『白石市文化財愛護友の会会報』第22号

吾妻俊典 2001 「多賀城周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究 聖武朝の土器様式』

いわき市教育委員会 2003 『梅ノ作瓦窯跡群』

菅原祥夫 2004 「東北地域における古代後半期須恵器窯構造」『須恵器窯の技術と系譜2』窯跡研究会

菅原祥夫・佐藤敏行 2004 「陸奥中・南部の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集2-8世紀中葉から12世紀を中 心として』窯跡研究会

望月精司 2004 「須恵器窯構造に関する構造名称や部位名称及びその機能」『須恵器窯構造資料集2-8世紀 中葉から12世紀を中心として』窯跡研究会

東北芸術工科大学考古学研究室 2007 『高安窯跡群 C 地点 1 次発掘調査報告』

宮城県多賀城跡調査研究所 2007 『木戸窯跡群Ⅲ』

桜井友梓 2009 「多賀城周辺の須恵器窯構造」『宮城考古学』第11号

菅原祥夫 2009 「東北」『古代窯業の基礎研究』窯跡研究会編 真陽社

第2表 出土陶磁器一覧

番号	出土地区、層位	種 別	特徴、年代	点 数	写真図版
1	A124、1層	不明	瀬戸、内外面鉄釉		
2	B-20、1~2層	不明	近代の大堀相馬か、外面は灰釉、内面は白 濁釉		
3	B-19、2層	染付椀	瀬戸美濃、刷絵、19世紀後半		
4	A 924、 2 層	小坏か	猪口、地方窯		
5	BS3-2、1層	輪花皿	蛇ノ目凹高台、刷絵、明治後半、地方窯、 口縁部直径14.5cm、底部直径7.2cm		
6	BS2-2、1層		堤焼		
7	BS2-2、1層	行平鍋	蓋受け、灰釉、幕末、地方窯		
8	B S 2-2		灰釉、象眼		13-5-1
9	BS3-3、2層		末家?		
10	B6-3、2層	鉢?	虎成不良、地方窯		
11	В-9、1~2層	鉢か甕	瀬戸美濃、鉄釉、近世		
12	2層	急須	常滑、近現代		
13	不明	椀	肥前染付椀、四方ダスキ、小型、18世紀代		
14	BS-1、2層	瓶	鉄釉、窯不明		
15	BS3-3、1層	鍋の蓋	大堀相馬か、幕末明治期		
16	1号溝確認面、埋土上層	徳利	肥前染付、江戸時代		
17	BS3-3、1層		末家?	2点	
18	B-19、2層、B-9、3層、 遺構面、BS2-2、1層		不明	3点	
19	BS1-4、表土XX		不明	2点	
20	A-23、2層	椀	刷絵、染付、地方窯、明治		
21	A-24、1層	擂り鉢	末家?		
22	B-I1、1~2層		末家?鉄釉に黒釉流し、近代		
23	B-11、1~2層		堤焼、なまこ釉、19世紀中頃		
24	BN-3、1層	小型椀	瀬戸美濃?近世か近代		
25	BS2-2、1層	椀	肥前染付椀、高台がやや大形、見込みに圏 線、火炎宝珠文、高台内は二重枠に文字文、 18世紀代		
26	BS-3、2層	皿か鉢	あけ釉、削り出し高台、近世		
27	B-1、1~2層		灰釉、産地時期不明		
28	BS-1、2層、BS1~4、 表土XX	徳利?	肥前、帆掛け船か風景文、植物、19世紀前 半か	6点	
29	A-19、2層	瓶の肩部分	鉄釉、地方窯		
30	A-19、2層	鉢	堤焼、なまこ釉、明治		
31			プリント印刷を含む明治半ば以降	13点	
32	B S 3-1	小型甕	末家?	2点	
33	B S 3-1	戸車	明治時代、直径3.5cm、孔の直径1.1cm		
34	BS3-1、1層		近現代	22点	
35	BS3-2、1層		近現代	4点	
36	B20、1~2層ほか		近現代	9点	
37	BS3-3、1層ほか		近現代	11点	

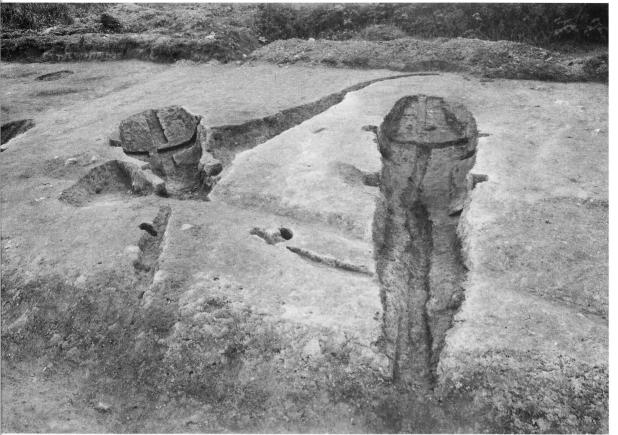
報告書抄録

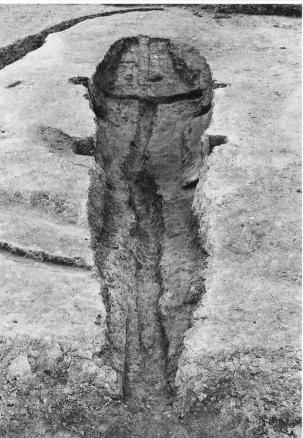
ふりか	5 な	はちま	こんざ	かい	ギル せき		盲 1 .	-	 うこくしょ				
書	名					調査報告		, , ,	, - , -				
副書	名												
巻	次												
シリー	 ズ 名	白石市	文化	財調	查報	设告書							
シリーズ	番号	第34第	Ę		-								
編著者	全	菅原祥	羊夫、	清野	俊太	:朗、日丁	和寿						
編集機	幾 関	白石市	了教育	委員	会								
所 在	地	₹989	-0206	宮垣	成県	白石市字	寺屋敷育	f25番地6	TEL: ()224	4 (22) 134	3	
発 行 年	月日	西暦2	009年	8月2	20 E	l							
ふりがな 所在地					コー	- ド	北緯	東経	調査期間	Ħ	発掘調査面積	調査原因	
所収遺跡名		1711-212		市町	村	遺跡番号	0 / //	0 / //	Drd TET 22/1 le	ı,	m	四.水四	
八幡坂遺跡	白石市	大平森	合字	042	06	02442	37° 59′ 47″	140° 36′ 55″	19870224 19870329 19870824 19871003	`~			
はちまんざかにし 八幡坂西 _{じん や あと} 陣屋跡	白石市	大平森	合字	042	06	02249	37° 59′ 46″	140° 36′ 48″	19870224~ 19870329		801.00	土地区画整理事業	
はちまんざかにし 八幡坂西 『遺跡	白石市	大平森	合字	042	06	02345	37° 59′ 46″	140° 36′ 48″		19870224~ 19870329			
前山遺跡	白石市	大平森	合字	042	06	02115	37° 59′ 40″	140° 36′ 55″	19870224 1987032				
所収遺跡名	種類	列	主な	時代		主な遺	 :構	主な	☆遺物		特記	事項	
八幡坂遺跡	窯跡		古代		竪岩土	恵器窯跡 穴住居跡 坑5基、 器埋設遺	2棟、	須恵器、土師器、 石鏃、鉄砲玉、 研石		恵	古代の刈田郡における須 恵器生産拠点跡の発掘調 査である。		
八幡坂西陣 屋跡、八幡 坂西遺跡	陣屋跡 布地	、散	古代	、近	なし			なし		八幡坂遺跡の鉄砲玉は伊 達政宗による白石城攻め に関連する遺物と考えら れる。			
前山遺跡	窯跡		古代		な	l		なし	なし		なし		
要約	八幡坂	遺跡で	は、	8世希	已初	頭から1()世紀初以	さまでの名	頁恵器窯跡	が1	2基発掘さ	れた。	





写真図版 1 上 調査区北側 下 調査区南側





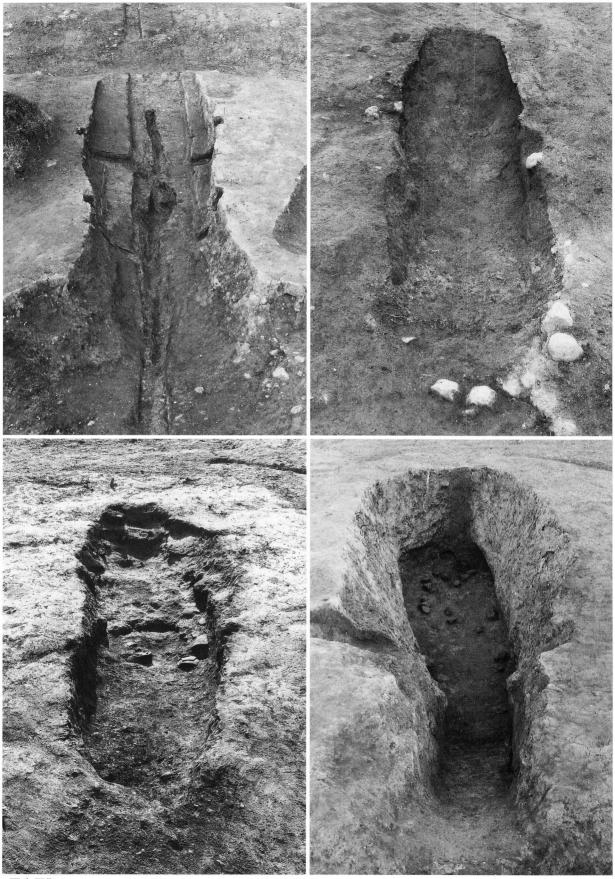


写真図版2

上 1・2号窯跡

右 第2号窯跡

左 第1号窯跡

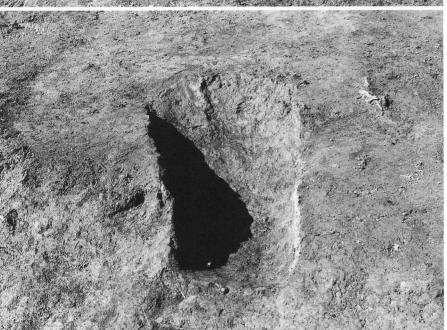


 写真図版3
 上左
 第4号窯跡
 上右
 第3号窯跡

 下左
 第8号窯跡
 下右
 第5号窯跡



第7・8号窯跡(7号は痕跡)

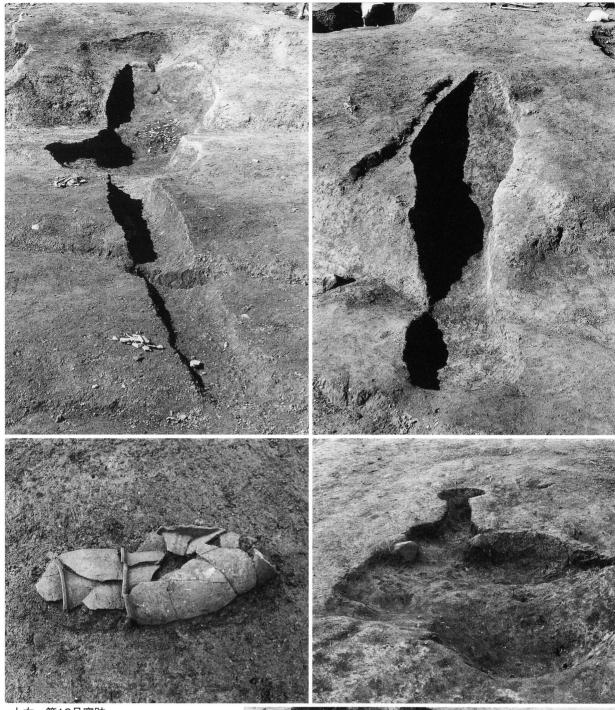


第11号窯跡



第13号窯跡

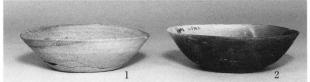
写真図版4



上右第10号窯跡上左第12号窯跡中右第1号窯跡中左カメ棺墓下第2号住居跡



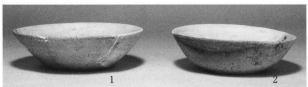
写真図版5



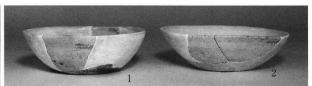
1. 1号窯跡出土遺物(1)



2. 1号窯跡出土遺物(2)



3. 1号窯跡出土遺物(3)



4. 2号窯跡出土遺物(1)



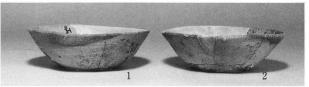
5. 2号窯跡出土遺物(2)・2号住居跡出土遺物



6. 3号窯跡出土遺物(1)



7. 3号窯跡出土遺物(2)



8. 3号窯跡出土遺物(3)

写真図版6



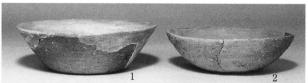
1. 3号窯跡出土遺物(4)



2. 3号窯跡出土遺物(5)



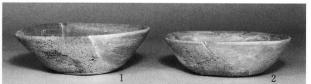
3. 3号窯跡出土遺物(6)



4. 3号窯跡出土遺物(7)



5. 3号窯跡出土遺物(8)



6. 4号窯跡出土遺物



7. 5号窯跡出土遺物(1)



8. 5号窯跡出土遺物(2)

写真図版7



1. 5号窯跡出土遺物(3)



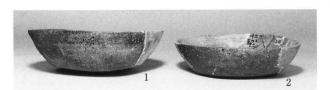
2. 5号窯跡出土遺物(4)



3. 5号窯跡出土遺物(5)



4. 5号窯跡出土遺物(6)



5. 5号窯跡出土遺物(7)



6. 5号窯跡出土遺物(8)



7. 8号窯跡出土遺物



8. 9号窯跡出土遺物

写真図版8



1. 10号窯跡出土遺物(1)



2. 10号窯跡出土遺物(2)



4. 10号窯跡出土遺物(4)



3. 10号窯跡出土遺物(3)



5. 10号窯跡出土遺物(5)



6. 11号窯跡出土遺物(1)



7. 11号窯跡出土遺物(2)・3号窯跡出土遺物



8. 11号窯跡出土遺物(3)

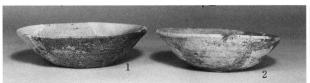
写真図版9



1. 11号窯跡出土遺物(4)



2. 11号窯跡出土遺物(5)



3. 12号窯跡出土遺物



4. 13号窯跡出土遺物(1)



5. 13号窯跡出土遺物(2)



6. 13号窯跡出土遺物(3)



7. 13号窯跡出土遺物(4)(13-4、13-10)



8. 2号住居跡出土遺物(1)

写真図版10



1. 2号住居跡出土遺物(2)



2. 2号住居跡出土遺物(3)



3. 2号住居跡出土遺物(4)



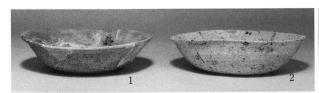
4. 2号住居跡出土遺物(5)



5. 2号土坑出土遺物(1)



6. 2号土坑出土遺物(2)



7. 2号土坑出土遺物(3)

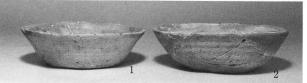


8. 2号土坑出土遺物(4)

写真図版11



1. 2号土坑出土遺物(5)



2. 2号土坑出土遺物(6)



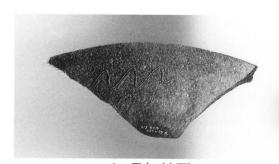
3. 2号土坑出土遺物(7)



4. 2号住居跡出土遺物(6)



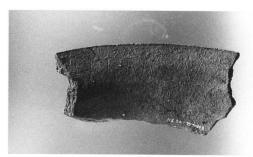
5. 5号窯跡出土遺物(外面)



6. 同左 (内面)



7. 5号窯跡出土遺物(外面)



8. 同左(内面)

写真図版12



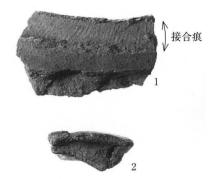
1. 1号窯跡出土遺物(外面)(第43図4)



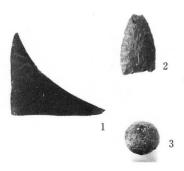
2. 1号窯跡出土遺物(内面)と円面硯(第44図2)



3. 北区調査区東側出土遺物 (第42図4)



4. 須恵器片 (BS-1、3層出土) と粘土塊 (竪穴出土)



5. 石鏃、鉄砲玉、陶磁器



6. 5号窯出土 須恵器が溶着した礫焼台



7. 前山遺跡出土 須恵器が溶着した礫焼石

写真図版13

白石市文化財調查報告書 第34集

八幡坂遺跡ほか発掘調査報告書

平成21年8月17日印刷平成21年8月20日発行

編集·発行 白石市城南第二土地区画整理組合 白石市教育委員会

> 〒989-0206 宮城県白石市字寺屋敷前25番地 6 電話: 0224 (22) 1343

印 刷 株式会社東北プリント

〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24

電話:022 (263) 1166

